

64



耳之衛生

醫學博士賀古鶴所講

館文博

家庭衛生講話  
編 初 第



# 百之衛生

醫學士

賀古鶴所講述

東京 博文館藏版

明治  
41 4 15  
丙午



陸軍 監醫  
醫學士 賀古 鶴所 先生

賀古先生は我國耳科専門家の始祖であつて、明治二十二年先生が歐洲から歸られて、日本赤十字社病院で初めて其専門の診療を始め、陸軍々醫學校で講義を始められた頃には、未だ日本全國に一人も斯科を専門として居る醫師を見なかつたのである。又先生が耳科新書を著はされて、大に斯科研究の必要を唱へられたのは、明治二十七年であつて、此頃には醫師の耳科學に注意する人は殆ど無つたのである。然るに最早今日では、帝國醫科大學に耳鼻咽喉科が設立せられて、斯學攻究の道が開かれ、市中には斯科を標榜せる多くの開業醫を見るやうになつたのは、大に盛んであると云はなければならぬ。然し今日でも一般の人は、耳に就て注意すること甚だ少なく、兎角耳病を等閑にする傾があるのは、誠に嘆すべきことである。故に

編者は先生の講話を乞うて、此編を公にしたのであつて、讀者が之によりて耳の養生の如何に大切であるかと云ふことを覺り、家庭に於て常に其注意を怠らぬやうにせられんことを希望するのである。

明治四十一年二月

編者 中川恭次郎識

# 耳之衛生目次

緒論	一
第一章 耳の構造と其作用と	五
第二章 初生兒の耳の衛生	一〇
第三章 兒童の耳の衛生	一八
第四章 成人の耳の衛生	四四
第五章 耳の一般衛生法	六八
第六章 耳病の統計竝に原因	九一
第七章 耳病の症候	九九
第八章 聴覺の検査法	一一一
第九章 耳の洗滌法	一二一

目次

第十章 鼓室に空気を通ずる法……………一三三

第十一章 注意すべき二三の耳病……………一三〇

第十二章 詐れる重聴及聾啞の鑑定法……………一五五

目次終

# 耳之衛生

陸軍々醫監醫學士 賀古鶴所先生講話

緒論  
耳病者の  
数



西洋の學者が調べたところによると、二十歳から五十歳迄の人の耳を、一々精しく検査して見ると、通常三人即ち六つの耳の中で、一つの耳はいくらか、工合の悪くなつて居ると云ふことである。又今迄一度も耳を病んだことはないといふ、ひ、現在少しも聴覺の悪くない者の耳を、醫師が検査すると、案外に鼓膜などに病氣に罹つた痕跡があつたり、現在もまだ病氣に罹つて居るのを見出すことが少なくない。殊に一

緒論

耳病の危険

つの耳だけの聴覚が悪くなつて居て、別に耳が鳴るとか、痛むとか云ふやうな症状のない者は、其家人は勿論、當人自身も一向気が付かないで居ることが多いのである。かやうに耳の病氣に罹つて居る者は、澤山にあつて、其數は眼の病氣に罹つて居る者よりも多い位であるのに、世間で之に注意することが少ないのは、耳の病氣は眼の病氣のやうに、素人がちよつと見てもわからぬからである。

耳の病氣は唯多いばかりでなく、素人の考へて居るよりも非常に危険なものである。それは耳と脳とは僅に骨の壁一重を隔てて隣り合つて居る部分があつて、稍もすれば、耳の病氣が腦の方に進んで往つて、恐ろしい腦の病氣を起すことがあるからである。其他聴覚が悪くなると云ふことは、大

耳の衛生の必要

に智力の發達の妨となるものであつて、學校の兒童などは、耳の遠い爲に、學業の成績が悪くて、進級することが出来ないて、甚しく他の兒童に遅れると云ふことは、日常多く見聞するところである。

耳の病氣の症候の中で、耳鳴は聴覚の悪くなつたのよりも、尙不快なものであつて、或は之が爲に精神病を惹起すやうなことがある。小兒が耳病に罹つて、全く聴覚が無くなつてしまつたならば、成長した後に、覺えて居た言語を忘れてしまつて、啞になることがある。又耳病の爲に重い全身病が起つて、生命を短かくするやうなこともある。

斯の如く、耳病の數は多く、耳病は危険なものであるから、耳は常に大切に保護して、病氣に罹らぬやうに注意しなければ

ばならぬ。従つて耳の衛生法は能く心得て居なければならぬのである。

耳の病氣は其初めに専門の醫師の診察を受けて十分に治療をしてもらへば大抵は癒るものであるが、若し等閑にして打棄つて置いたならば遂にはたとひ治療を加へても癒らなくなつて幾分か聴覺が悪くなり或は全く聴えなくなつて、交際上に甚しい不便を感じ、人生の快樂を減ずるばかりでなく、職務を執ることが出来なくなつて、自身の地位を保ち得ぬ場合に立至ることがある。

又耳を診察してもらつた爲に、腦の病氣が明らかになることがある。たとへば頭を打つたときに、別に外面には傷がなかつても、耳の中の異常を見て、頭の中に損傷があると云ふ

耳の構造と其作用  
耳の區別

ことがわかり、眩暈、頭痛、顔の麻痺、神経痛などのある者は、耳の診察で其原因のわかることがある。

故に耳の病氣は勿論のこと、其他の頭部、腦の異常のときにも、耳科の知識を持つて居る醫師に耳の診察を受けると云ふことは、甚だ必要である。

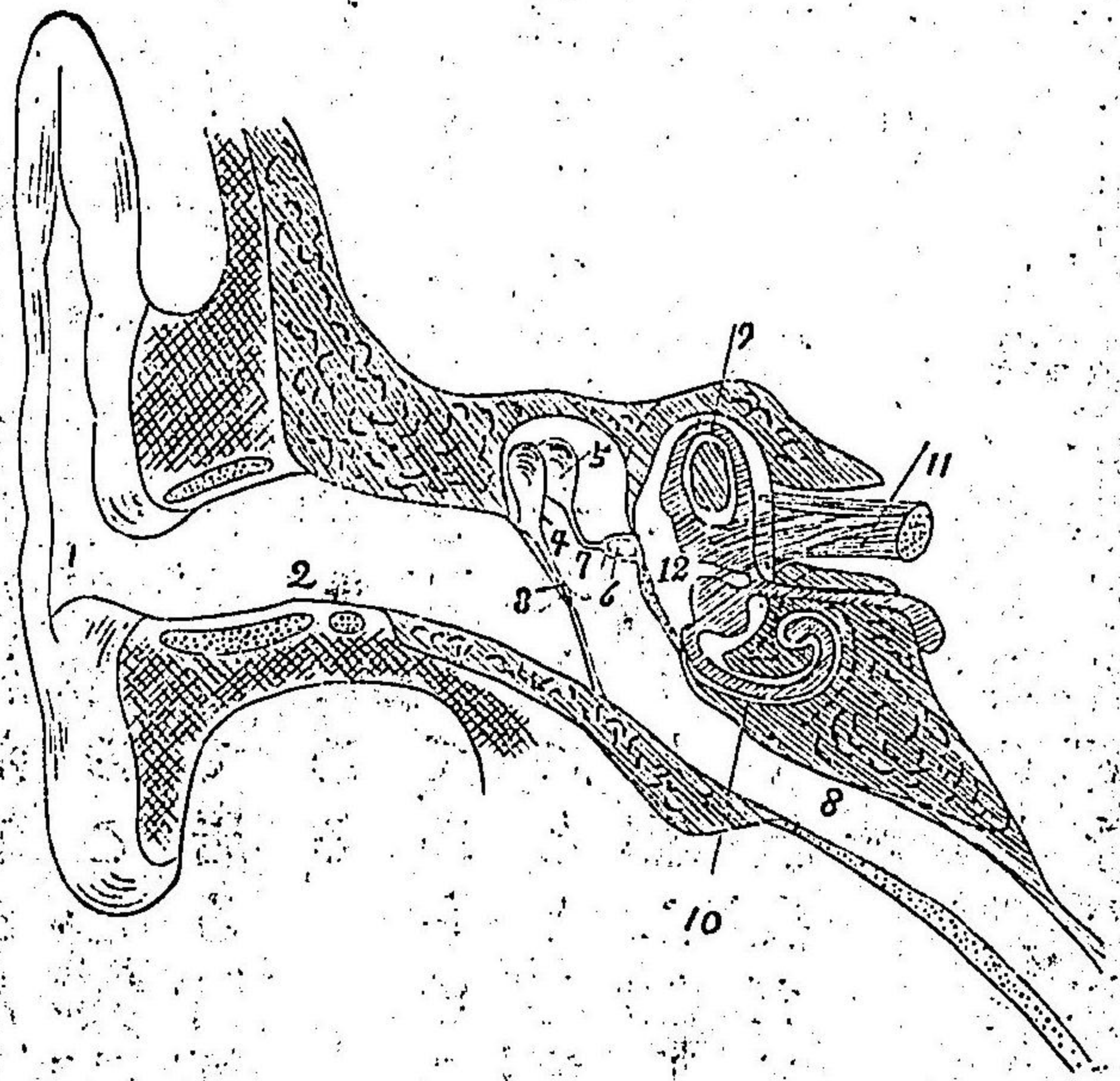
是より以下順を追うて、あらゆる家庭の人々の爲に、耳の養生に就て注意すべきことと、耳病に罹つたときに注意すべきこととを述べやうと思ふ。然し之を述べる前に、まづ耳の構造と其作用との極く概要だけは説いて置かなければならぬ。

第一章 耳の構造と其作用と

耳は頭蓋の兩側で顛顛骨の中にあるものである。之を外耳



外耳



が外耳と中耳との境である。

耳の断面の假想圖

中耳内耳の三部分に區別する。外耳は耳翼圖の1と外聽道圖の2、耳孔とから出來て居る。外聽道の奥に薄い膜が張つて居て、耳の孔を明るくすれば、外から之を窺うことが出来る。之が即ち鼓膜であつて、俗に耳の障子などと呼んで居る。此鼓膜

中耳

中耳は空氣の満ちて居る一つの空洞であつて、此空洞はオイスタヒー管圖の8、ト名づくる長い管によりて、咽頭と連絡して居る。言葉を換へて云へば、オイスタヒー管が中耳と咽頭との交通を司つて居るものであつて、咽頭の空氣は此管を傳うて中耳の中へはいりこむことが出来る。故に唾や水などを飲みこむときに、咽頭の空氣が此管から中耳の中へはいりこんで、耳の底にミシリと云ふ一種の音が起るのである。

中耳には槌骨圖の4、砧骨圖の5、鐙骨圖の6と名づける三つの小さな骨が相繋つて存在するものである。其槌骨の一端即ち槌骨柄と稱する部分の端が鼓膜の中央に附着し、鐙骨の基底が内耳の前庭圖の11の卵圓窓と名づくる部分に

内耳

音響の傳

はまりこんで居る。中耳の空洞は鼓室圖の(7)と稱せられるのである。

内耳は又迷路と稱せられ、名の如く、甚だわかり難い複雑な構造であるが、之を區別すると、前庭圖の(1)蝸牛(圖の(2))半規管(圖の(3))の三部分になる。内耳の空洞中には、凡て液體が満たされて居る。

腦から出て來た聽神經圖の(1)の終末は、蝸牛の上に並んで居るものである。

音響は外聽道からはいつて來て、まづ鼓膜に觸れて、之を顫動せざる、そして其顫動が鼓膜と連つて居る中耳の三つの聽骨に傳はり、砧骨の基底から卵圓窓を経て、迷路内の液體にも顫動を起し、聽神經の末梢が、其顫動を感じて、腦の中

オイスター  
管の  
作用

聽神經の中樞に傳達して、音響の感覺を起すものである。

中耳と咽頭とを連ねて居るオイスター管は、常は閉ぢて居るが、物を嚥み下す時に開いて、鼓室に空氣を通じ、之によりて、鼓室内の空氣と外界の空氣との壓が平均し、鼓膜が容易に顫動して、音響を内耳に傳へることが出来るのである。

故に若しオイスター管の粘膜が腫れなどして、物を嚥みこむときにも、空氣が咽頭から中耳に通らなかつたならば、鼓室の空氣が薄くなつて、其壓が減じ、外氣の壓が高くなつて、鼓膜は鼓室の方へ壓しつけられ、且鼓室に液が溜つて、鼓膜の顫動が妨げられ、従つて聽覺が悪くなる。

聽器の機能は甚だ靈妙不可思議のものであつて、専門の學者にもわからぬことが多いのであるから、到底素人の方が

初生児の  
耳の衛生

小児の  
注意  
の  
生  
意

詳しく理解せらるゝやうに説くことは出来ぬ。以上述べた  
 ところは眞に概略に過ぎぬのである。  
 第二章 初生児の耳の衛生  
 耳は五官器の中で最も屢病氣の原因となるやうな害に觸  
 れ易いものであるから、其衛生には特に注意しなければな  
 らぬ。又吾々は互に聴器によりて、自分の持つて居る思想を  
 他人に告げ、他人の觀念を自分に受けて、性情を發育し、知識  
 を増進させることが出来るのであるから、耳は初生児の時  
 から甚だ大切に保護しなければならぬ。  
 小児が生れたならば、其耳の孔は最も注意して検査するこ  
 とを怠つてはならぬ。それは初生児の耳の孔には、往々澤山  
 に垢が溜つて居ることがあつて、之が爲に初生児のかよわ

初生児の  
呼吸を始  
める  
時  
の  
耳  
の  
状  
態

い鼓膜に炎症が起つたり、腫物が出来たりするやうなこと  
 があるからである。斯様な耳垢は、醫師が注意して掃除しな  
 ければならぬ。尙耳科に就て知識のある醫師ならば、此際中  
 耳竝に鼓膜をも十分に検査する必要があるのである。  
 初生児が其呼吸を始めて、空氣が中耳の中へはいると、中耳  
 の中に是迄存じて居た膠様の物質が吸収せられる爲に、著  
 しい生理的の變化が始まるものであつて、若し其變化があ  
 まり劇しく起ると、中耳に炎症が起つて、聴覺を悪くしたり、  
 或は其炎症の内耳に迄及んで、全く聴覺を失うてしまふや  
 うなことがある。  
 然し此胎児のときに溜つて居る中耳の中の膠様の物質が、  
 呼吸が始つて、空氣が中耳にはいつて來れば、おひおひに吸

冷濕の害

耳を壓迫する害

收せられて無くなると云ふのが生理的であるから、若し初生兒の呼吸が弱くて、空氣が中耳にはいらぬときには、醫師は適當の方法で、空氣を中耳に輸つて、其物質の吸收を促がさなければならぬ。此胎兒の時から存して居る中耳の膠様の物質の吸收のことは、素人には見わけることも、所置をすることとも出来ぬが、唯注意すべきことである。と云ふことを報らせる爲にちよつと述べたのである。

初生兒の耳は成人の耳よりも、一層注意して冷たい濕氣に侵されぬやうにしなければならぬ。初生兒の外聽道は成人に較べると、甚だ短かいから、斯様の害は直に鼓膜を襲ふものである。

初生兒は成るだけ温かにして置くがよいと云ふ考で、頭巾

耳垢の害

劇しい音の害

を耳までも被らせて、其上から紐で緊く縛つて居るものを見る。ことが屢あるが、それは甚だよろしくない。常にかやうなことをして居ると、其壓迫の爲に、皮膚に炎症が起つて、それが耳の孔まで廣つて、濕疹が出来たり、或は其壓迫の爲に耳翼が板のやうに平らになつて、畸形が残つたり、耳翼が頭に觸れるやうに近づいたりすることがある。

初生兒の耳翼の掃除を等閑にして垢を溜めて居ることが、能くあるが、之は注意しなければならぬ。殊に夏季には屢掃除をするがよい。之を怠つて居ると、耳翼の皮膚に炎症が起つて、容易に癒らないで、大に小兒が不機嫌になることがある。

初生兒にはあまり喇叭や、笛や、劇しいがたがたと云ふやう

耳の注意

な音などを續いて聞かせるのはよろしくない。若しいつも騒がしい響などを聞かせて居ると、遂には聴神経の機能に甚しい障碍の起ることがある。又之と同じわけて、子守や乳母などが、初生兒の耳の近傍で手を叩いたりなどするものもよろしくない。斯様のことをしたり、耳に接吻したりするのは、悪い習慣であつて、此愚かなる振舞の爲に、屢小兒の中耳に充血を起し、或は鼓膜を破つたと云ふ例も決して少なくはない。但此事は決して小兒だけに起るのではない。成人にも同じやうな害を受けることがあるもので、或立派な婦人が、耳に接吻をせられた爲に、中耳炎を起して、醫療を受けたと云ふやうな例が、歐洲にはあるのである。

耳聾(外聽道に分泌する粘い液であつて、其固つたのを通常

耳の注意

耳垢と稱へて居るの分泌に就ても、常に注意しなければならぬ。若しあまり多く、耳聾が分泌するか、或はあまりそれが固くなつたならば、外聽道が塞がり、或は外聽道の壁が刺戟せられ、或は鼓膜が壓されなどして、之が爲に危険な症状の起ることがある。故に耳聾が溜つたならば、微温湯で、スポイトを用ひて、外聽道を洗うがよい。俗間には、此場合に牛乳や油の類などを滴らしこむことがあるが、それはよろしくない。何故ならば、滴らしこんだ油が分解して、脂肪酸と、リスリンとを生じ、此の二物が、外聽道壁や鼓膜を刺戟したり、或は其中に有害の微菌の發育を易からしめて、之が爲に外聽道の病氣を起させる恐があるからである。

耳の掃除をする爲に、角製又は金屬製の耳匙を用ふるのは

よろしくない。斯様な耳匙を使へば、耳聾は唯一部分だけ除き得るに過ぎぬのみならず、却て之で聴道に傷をつけて、炎症を起させたり、或は鼓膜をつき破つたりすることがある。外聴道はどう云ふ風に彎つて居るか、と云ふことを知らぬ人が、無暗に耳聾塊を取出さうとして、却て之を奥の方へやつてしまふことがある。外聴道の外の方の四分の一乃至三分の一迄にある耳聾塊又は粉末を取出すには、匙形の耳匙を使ふよりも、細い棒のさきに綿花又は海綿をつけたものの方がよい。即ち此海綿を微温湯に浸して、外聴道の中へ廻はしながら挿しこんで掃除をすると、少しも害なくして、奇麗にすることが出来る。もし海綿を用ひたならば、一度ぎりて捨ててしまふか、さうでなければ熱湯で能く洗ふて清潔

に保つて置くがよい。

マントテガッタが耳聾栓を溶かす目的で「エーテル」並に其他の薬液を外聴道に注入するはよろしくないと云うたのは尤もであるが、同氏が耳の最も適當な衛生法は、あまりいぢらないと云ふことであつて、外聴道は身體中で唯一の垢づいても妨ない場所である、と云うたのは、どうもうけひき難い。説で、外聴道には多く脂肪が溜まり、微菌の甚だ蕃殖し易いものである。最早今日は耳聾は腦の分泌物で、それが耳から排泄するのだと信じて居たト、ラフシエツチ時代ではないが、同氏が外聴道は清潔にして、其排泄物を注意して除かなければならぬと説いたのは、今日も尙服膺すべき言葉である。古人は、耳聾を非常に聴覺に關係があるものと信じて居た

兒童の耳の衛生  
外聽道の異物

が今日では左程には認められなくなつたのである。

第三章 兒童の耳の衛生

兒童時代に最も注意しなければならぬのは、外聽道に異物のはいることである。是は甚だ屢見うけるところであつて、其異物にはいろいろの物がある。異物の硬い物では、小石、南京珠、石筆、果實の核など、軟かな物では、綿の塊、穀物及植物の小片などである。穀物は耳にはいつてから、中の分泌物で濕うて膨れて大きくなることがある。異物の中で最も多いのは赤小豆である。それは小兒がねころんで居ながら、赤小豆のはいつた手珠を弄ぶやうなことが多いからであつて、余は嘗て兩側の耳に二粒宛赤小豆を入れた小兒を診察したことがある。生きて居るものでは、睡眠中に蠅、蚊、蚤などがはい

耳蛆

りこむことがある。耳蛆と稱へるのは、耳漏のある者の耳に、蠅が卵を生みつけて、それが孵化つたのであつて、随分澤山に出来て、うじうじ動いて居るのが認められる。若し鼓膜が破れて孔があいて居ると、蛆が中耳に迄這ひ込むものである。異物は、大抵誤つて入れるのであるが、まだ小さい兒童が自分の手で持つて往つて、わざと入れることがある。又素人療治の目的で何か病氣があるときに、耳へ物を入れることがある。素より斯様のことをしても、全く有害無効であるが、齒の痛むときに、耳に葱などを入れたり、耳の焮衝のときに、豕の脂を入れたり、耳病の妙薬と稱へて、蟬の殻の黒焼を油で練つて入れたりすることがある。又海水浴などの時に、海水

の耳にはいるのを防ぐ爲に大砲射撃などの時に劇しい音響を防ぐ爲に耳に栓をした綿が中の方へはいりこんで異物になることがある。

異物は外聽道の口もとに懸つて居ることもあれば、奥深くはいりこんで鼓膜に接した聽道の下側の窪いところに止まり、外から覗いても唯其一部分だけ見えることもある。斯様な奥の方まで異物がはいつて往くのは偶然のこともある。あれば、口もとにあつたのを取出さうとして、却て押込んだのであることもある。或は疎暴に異物を取り出さうとした爲に、異物が鼓膜を破つて、鼓室に迄はいることがある。

異物は硝子のかげなどのやうなさきの鋭いものでさへなければ、大抵聽道に焮衝の起るやうなことはない。嘗て脱け

異物の害

た齒の缺けたのが、四十年間も何事もなく聽道に留つて居るのを見たことがある。又石筆の長さ一寸太さ數分のもものが二十年ばかりも耳にはいつて居たことがあり、毛絲を編む棒が折れこんでゐたこともある。其他小兒の外聽道に多くの砂のはいつて居るのを七箇年も経つてから初めて見出したことがある。穀類が幾年も耳にはいつて居たと云ふ話は別に珍らしいことではない。

異物の爲に外聽道が全く塞つたならば、耳に何か充ちて塞つて居るのを感じ、聽覺がわるくなる。異物が奥の方へはいりこんで鼓膜に觸れると、安眠を得なかつたり、頭痛が常になりたり、耳鳴がしたり、眩暈が起つたり、稀には嘔いたりする。蠅、蚤などがはいると、其動く音が恐ろしく劇しいので、非常



異物を取  
出す注意

に不快なものである。然し蠅の蛆は唯僅に這ふ音がするだけである。

最も危険なのは、不慣なものが異物を取らさうとすることである。殊に暗い耳の中へむやみに「ピンセット」を入れて異物を狭まうとするのは、甚だ危険であつて、之が爲に異物を深く押込み甚しきは鼓膜をつき破つて鼓室迄異物をはいらせることがある。或は異物のある部分の組織に傷をつけ、或は焮衝を起させて、遂に生命を失はさせるやうなことさへあるものである。又あやまつて聽骨をむしり取つた例もある。或はたとひ斯様な危険が無いにしても、豆などがはいつて居るときには「ピンセット」で其皮を破つた爲に、豆が濕氣を吸うて膨れて益取出し難くなることもある。

異物を取らさうとして過つて奥の方へ押入れた爲に、遂に死に至らしめたこと云ふ例を學者が報告したことが少なくない。エントの報告したのは、異物を取らさうとして、誤つて奥深くつき入れた爲に、劇しい焮衝が起つたので、「クロロフォルム」を用ひて患者を麻酔させて置いて漸く取出すことを得たが、後に腦膜炎を起して死んだと云ふ例である。又耳にはいつて居る綿球を疎暴に取出さうとした爲に、死に陥らせたこと云ふ例を報じて居る人がある。レ非イは、兵士が自身の職務を免れやうとして、燧石を耳の中へ入れたのを取出したところが、其翌日顔面神経の痲痺が起り、中耳炎を發し、遂に腦膜炎が起つて死んだと云ふことを書いて居る。フレンケルも之と同じやうな事實を報告して居る。モオスは、耳

異物の取出し

の中へ石の小さな一片のはいつたのを二三人の醫師が取出さうとして、無暗に鉗子を用ひた爲に、耳から度々劇しい出血があつて、寒けがして戦慄が起り、嚔語を云ひ出すやうになつて、遂に死んだ者があると云ふことを報じて居る。故に耳の異物は輕卒に無理な取出しかたをすることは出来ぬ。

耳の異物は耳科醫に托して取出してもらうのが安全であるが、中には家庭でも除くことの出来るものがある。南京珠、小石などが耳にはいつたときには、頭を其耳の方へ傾むけて、其頭を手で下から打つと轉つて出る。耳を打つてはいけない。其他の異物でも、大抵「スポイト」を使つて微温湯で洗へば除くことが出来るものであるから、注意してくり

かへしくりかへし洗うがよい。圓い異物が耳にはいると、其上と下との部分と外聽道壁との間に間隙があるものであるから、そこへ向けて水を注いで、異物の後ろへ水が廻つて、異物が前へ押出されるやうにするがよい。「ピンセット」は異物が軟かなもので、其端が口もとへ現はれて居て、確かに挟むことの出来るものでなければ、用ひてはならぬ。尙注意して置くが、洗ひ水は冷いと頭痛や眩暈や嘔き氣を起すものであるから、いつでも微温のものを用ひなければならぬ。生きて居る物が耳にはいつて劇しい音がして、我慢の出来ぬときには、其耳を上にして横に臥させて、耳の孔一ばいになるまで微温湯をつぎこめば、直に動かなくなる。それから之を取出すには、「スポイト」で洗へばよいのである。

手に  
觸る  
る耳  
に害

以上のやうな方法で除くことの出来ぬ異物竝に初めから取出し難さうな異物は素人の手でいじらないで、早速専門醫の診を受けるがよい。

兒童の父兄竝に教育者などは決して耳翼に手荒く觸れるやうなことをしてはならぬ。兒童を起立させるとか顔の向きを換へさせるとか云ふ時に、學校の教師などが強く痛むほどに甚しく兒童の耳翼を引張るのを、今日でも往々見聞することがあるが、それは甚だよろしくない。之が爲に兒童が外耳及中耳の炎症を起すことがある。此耳翼を引張るよりも、尙一層危険なのは、外耳の部分を手で打つことであつて、之が爲に耳に充血を起したり、鼓膜を破つたり、甚しきは迷路の震盪の爲に聾になることがある。

鼻の病  
及  
鼻  
の  
害

醫師竝に教育家などが兒童の耳を牽くこと及平手で打つことの有害危険に就て注意するやうになつたのは、全く有名なるサロの「ドクトルメルヒオオル」の主張した爲であつて、同氏が此問題を唱へたのは、嘗て親しく或小學校で教師が生徒を罰する爲に、耳翼を牽き且振り動かして、引立てるのを目撃したからである。

中耳の機能の障礙を防ぐには、まづ第一に鼻の病氣に罹らぬやう注意するのが肝要である。

先づ先天的に小兒の鼻に病氣があつて、それが咽頭からオースタヒ管に傳はり、之が爲に管が狭くなつて、空氣の咽頭から中耳へ疎通することが妨げられ、中耳の機能の大部分が廢滅せられて、延いて迷路の機能を害し、遂に其小兒が

呼吸と耳との關係

後天性の聾啞になることがある。此症は初めの中はまだ癒る見込があるが、時を経たものは到底不治である。

若し鼻加答兒が中耳に迄蔓延したならば、化膿性の中耳炎が起る。無識の者は耳から膿が流れて出るのを病氣の癒る徴として喜ぶことがあるが、決して良い徴ではなくて、小兒は之が爲に聾になつたり、尙不幸の場合には、腦の炎症を起して死するやうなことがある。

故に中耳の病氣の起るのを豫防するには、鼻竝に咽頭の加答兒を適當の時期に十分に治療すると云ふことが、甚だ肝要である。實際中耳の病氣の大部分は、鼻の病氣から來ると看做してよい。

又呼吸の壓力の爲に、中耳に外傷性の機能の障礙が起ると

云ふことは、劇しい咳嗽又は噴嚏の時に、鼓膜が破れて、中耳に出血することがあるのによつてもわかる。又風邪にかゝつて鼻が塞つてゐるのに、強く涕をかんで、高壓の空氣がいくらか腫れて狭くなつてゐるオイスタヒー管を通つて、急劇に中耳にはいつた爲に、耳に痛を起したり、中耳炎を起したり、鼓膜を破つたりすることは、日常多く見るところである。元來聽器は呼吸器が延長して出來たものであつて、其互の機能は甚だ密接な關係を有して居る。即ち中耳の機能は、初生兒が第一の呼吸をして、其空氣がオイスタヒー管を傳つて鼓室に侵入すると同時に始まるものである。

成人には神経性の聾があるが、稀には小兒にも腸の寄生虫の刺戟などの反射で、耳には何の異状も無くて、神経性の聾

聴器の官能の智力との関係

學校兒童の重聴

の起ることがある。聴器の官能の良否は、兒童の理性並に精神の發達に重大の關係を持つて居るものであるから、耳の保護は學校衛生の上から見ても、最も注意しなければならぬことである。重聴即ち耳の聴えの遠い小兒は、學校に於て、眼の近い小兒ほどに注意せられぬことが多い。其父兄も受持教師も一向氣付かずして居ることがある。若し教師が兒童の重聴に氣が付かないと、其兒童の成績のよろしくないのを見て、全く怠惰放漫の爲であると看做し、罪の無い者を屢罰するやうなことがある。然し此怠惰放漫のやうに見えるのは、全く重聴の爲に教師の言葉を明らかに聞き取り得ぬからであつて、如何に罰せられたとて改めることは出来ぬ。斯様の

重聴は、曾父兄教師が氣付かぬだけでなく、兒童自身も亦氣付かないことがある。耳の健康な兒童は、重聴の兒童よりも教育の成績のよいのを見ても、重聴を癒すと云ふことが、學校及兒童の利益であるのは明らかであるに拘らず、よほど甚しい重聴の兒童さへも、多くは注意せられないで等閑にしてあるのは、誠に嘆すべきことである。嘗てフライデルフヤの萬國醫學大會でブレーグと云ふ人が、小學校内には意外に重聴患者が多いと云ふことを報告して、是等の兒童の教授法の研究の必要を述べたことがある。ハルトマンも亦伯林醫會で二人の學校兒童を示したことがある。其一人は四箇年間、他の一人は五箇年間、重聴の爲に最下級に止められて居たものであつたが、其一人は治療を

の學校兒童  
數聽者

加へて重聽が癒つてから、學業が甚だ著く進歩し、他の一人は治療を加へても、重聽は輕快することを得なかつたが、聾啞院に送られて、茲で相當の教育を受けることになつた者である。ハルトマンの此報告があつてから、普魯西國の義務省では、學校醫の問題中に、兒童の重聽のことを舉げて注意するやうになつたと云ふことである。

百人の學校兒童の中で、十五人乃至二十人は六乃至八メートルの距離で、高い聲で話した言葉を書き取ることが出来ぬ。ポルドーの衛生雜誌に掲げたムールの統計に依ると、検査した人數四千七百八十八人中で、聽力の不完全の者が十七、プロセントにあつたと云ふことである。氏が聽力不完全と認めしたのは、普通の人が十五メートルの距離で聞くことの

出來る低音を五メートル以上では聞き取り得ぬものである。

學校兒童の重聽に就ての統計は、諸學者の調べた數が互に一致して居らぬが、教師竝に學校醫が兒童の耳に注意しなければならぬと云ふことは、異口同音に唱へて居る。

ベツォルドがミンヘンの學校兒童に就て調べたところによると、耳病に罹つて居る兒童の四十一・七、プロセントは適當の治療を加へたならば、確に全治若くは多少輕快し得るものであつたと云ふことである。グロスワルテンブルグの區醫リヒテルが國民學校で七百人の兒童に就て調べたところによると、其中の百十人は聽力が減損して居るに拘らず、まだ一回も醫師の治療を受けたことのない者で、唯十人だ

けは、耳病の爲に以前治療を受けたことがあつた、殊に其中の二十三人は随分劇しい重聴で、連も普通の學校では教育の出来ぬ者であつた。そして以上の重聴兒童の半數は、其兒童自身も教師も氣が付いて居なかつたと云ふことである。氏は此検査の成績によつて、耳病の兒童の爲に治療所を設ける必要を主張して居る。

メクレンブルグのレムッケの説に依ると、二百五十一人の後天性の聾啞中で、百四十五人(五十七「プロセント」)は醫師の治療を受けて居るが、九十八人(三十九「プロセント」)は唯時々耳病の爲に、一般の所置を受けたに過ぎぬ。そして後天性聾啞の三分の二は、耳病が原因であつて、若し之に適當な治療を施したならば、聾啞となることを免れ得たものであつたと

云うて居る。

遅鈍な學校兒童の爲に、補修學級を設けて置く、其最下級には、いつも重聴の甚しい小兒が止つて居る。それは重聴の爲に、精神發育が不十分で、補修學級に止まる兒童が多いから、従つて補修學級中には重聴者が多いのである。プラウエンのチルネルは補修學級の兒童六十七人中に十八人(三十七「プロセント」)の重聴兒童を見出し、伯林のカリシエルは遅鈍の兒童二百五十五人中に、聴覺の傷はれた者が三十五「プロセント」あつたと云うて居る。

以上の種々の統計を見ても、小兒の耳の検査は等閑にしてはならぬと云ふことがわかる。學校兒童の、三乃至四メートルの距離で、十分に人の言葉の聴取ることの出来ぬものは、

成るべく教師の近いところに坐席を與へるがよい。若し重聽兒童が澤山に在つたならば、其兒童だけで特に一つの組を編成するがよいのである。聽力検査には、普通の袖時計を用ふるがよい。大抵十センチメートルの距離で時計の音を聽くことが出来る者は、七メートルの距離で通常の言葉を聞き取り得るのがあたり前である。然し此検査は戶外で行うたのと室内で行うたのとで、大に結果が違ふ。教室の構造が共鳴の起るやうになつて居ると、非常に言語を聞き取ることが妨げられるもので、一番後ろの列に居る生徒などは、殆ど教師の言葉のわからぬことがある。物理學上の法則にて、音響の強さは距離の自乗に反比例するものである。故に凡ての生徒に聽取り得るやうにするに

は、教師は、其つもりで發音しなければならぬ。教室の廣さは九メートルが最もよい。

學校の周圍が噪がしくて、教室の壁が薄いときには、聽力が著しく害せられ、從つて甚しく授業の妨となるものである。教師よりも父兄よりも不注意者と看做され、怠惰、放慢で學業の進歩の見込の無い者と認められて居る兒童は、其實は耳病患者であつて、醫師の治療を受けなければならぬはずである。常に教師や父兄から叱責せられて、學校ではいつも末席に置かれて居るのは實に憐むべきことである。故に兒童の能力と其將來の學業の進歩とを判断するには、第一にあらゆる方法を盡して、眼と耳との機能に障礙はありはせぬかと云ふことを調べ、若し障礙のあるのを見出した



重聴兒童の教育法

ならば、手遅れにならぬやうに所置をすると云ふことが必要である。トロルツが人の道德的及能力的の發達は、一に耳の管能の状態に關するものであると云うたのは、決して誇大の言ではない。

パウグマンは精神の發育の不十分な重聴兒童の教育法を考察し、之を自分の學校の重聴者並に聾者に用ひて十分に効があつたと云ふことを報告して居る。此方法は成るべく早く行ふがよいのであつて、其教育法の主眼は、兒童をして正しき觀察に慣れしめ、聲音上の注意を勧め、且屢發聲せしめ、成るべく多く實物を見させて言葉と實物との觀念を結合させるやうにし、正しく話し、正しく書くことを勵まし、眼と耳とにて言葉を理解することを習はせ、言語と筆書とに

て意思を交換させ、そしておひおひに流暢に談話をし、自由に人の談話を聴取り得るやうにならせるのである。小兒に言葉を多く覚えさせると云ふことは甚だ必要であつて、言葉の修養の缺けて居る小兒は一般の理解力を進めることが出来ぬ。

重聴者は成るだけ健康の小兒と屢對話させると云ふことが甚だ必要であるから、其小兒は下級の生徒又は補修學級の生徒とばかり談話をさせないで、出来るだけ健康な耳を持つて居る同輩と話させるがよい。又之を教育するには、成るだけ教師の近いところに居らせて、始終特別に注意しなければならぬ。

甚しい重聴の小兒を教へるには、まづ其小兒に教へる人の

重聴兒童  
個人教育

口つきを氣をつけて見るやうにさせるがよい。聾啞教育の場合に、兒童が見真似が上手になると云ふことは、屢實驗するところである。甚しい重聴の兒童を教育するに最も適當なのは、兒童に個人教育を受けさせると云ふことである。ハルトマンは嘗て兩方の耳の甚しい重聴に罹つて居る兒童で、高い話し聲を漸く三十センチメートルの距離で聴くことの出来る者に、暫く個人教育を試みたところが頗る良結果で、健康の小兒と共に談話が出来、やうになつたと云ふことである。聾啞院では斯様な良い結果は得られぬ。個人教育を行ふて既に小兒の理解力を養成し得たならば、それから後は、教師が特別に注意して他の小兒たちと共に普通の教育を受けるやうにさせてもよい。

甚しい重聴の兒童に個人教育を行ふには、凡て概念を正しく養ふやうに注意し、兒童の了解し得ぬことは反覆して教へ、知識の缺けて居るところは、補うて行くやうにしなければならぬ。此個人教育の目ざましい效のあると云ふ適例がある。即ち嘗て唯少しばかり聴力の残つて居る聾啞の小兒が、女教師でも聾啞教育の経験のあるでもない婦人に導かれて、著しく聴力が恢復して、高等の學校にはいることが出来たと云ふことである。此兒童は教育の初めには全く言葉を出すことを得ないで、唯無意味の高い聲で叫ぶだけであつたが、非常に辛苦をして、實物を示しながら話をし、且同時に兒童の概念を養成することを務めた結果、聲語教育法を用ひないで、兒童が能く言語を習ひ得たのである。ハルトマ

ンが此兒童を診察したときには、既に高い話聲を右の耳は三十センチメートル、左の耳は二十センチメートルの距離でくりかへすことが出来たと云ふことであつて、聾啞院で聲語教育をしたよりも、成績がよかつたのである。此例に依つても、聴覺の残つて居る聾啞の兒童は、適當の治療と教育殊に個人教育とで十分に癒す見込があると云ふことがわかるが、甚だ遺憾であるのは、此個人教育と云ふことが一般に行はれ難いと云ふ點である。然し聾啞學校殊に其寄宿舎で兒童を管理すると云ふことも、甚だ手數のかかるもので、却て個人教育の方が仕易いほどである。大きな都會では、かやうな兒童を數人宛集めて教へると云ふ設備が必要である。其一組は凡そ六人、若くは十人を限つ

て教へるのであつて、其教へ方は「ミンヘン」の聾啞院で聴覺の残つて居る聾啞を教へる法に倣うて、其兒童相互の間に言語のわかるやうに勉めさせ、且教師は兒童の側近くに居て其云ふことが兒童にわかり易くなるやうにしなればならぬ。個人教育も出来ず、又右に述べたやうな特殊の學級を設けることも出来ぬ場合には、止むことを得ず、言語を解し得る兒童でも聾啞院に入れなければならぬ。小學校に置いては遲鈍であるが、ざりとて聾啞院に入れるほどでもない、と云ふ中間の重聽者がある。是等の兒童は小學校の方か聾啞院の方かに、特別の學級を設けて成るだけ、實物教授で之を開發して其進歩するのを待つて、普通の小

成人の耳の衛生

聴覚と理性

學校に入るやうにするがよい。  
 第四章 成人の耳の衛生  
 耳は全く獨立の感覺を司どる器官であつて、五官器の中でも他の感覺を司どる器官との關係が最も薄い。即ち耳から受ける感覺は、視覺又は觸覺によりては少しも感ずることには出來ぬ。そして遠近から耳にはいつて來る音響は、少しも變化しないで聴覺を起すものである。  
 理性の發達と言語の發達との同じ歩調を取つて居ると云ふことは比較文明史の示すところであつて、耳の聴えのわるい者は、其理解力の範圍が狭くなつて居り、聾啞の腦力は唯人工的に覺えた言葉以外に出ることは出來ぬ。かやうに聴力は理解力に重大の關係を持つて居るものであるから、

聾者と盲者と

聾啞は人間の一部分が死んだのと同じことである。  
 ボンナフオンは次のやうなことを云うて居る。盲者は物質界を知らぬが、聾者は精神界とは全く他人である。故に物質的の艱難は、盲者よりも聾者の方が堪へることが出来るが、精神道的苦痛には、聾者よりも盲者の方が打勝つことが出来る。往古からの歴史を見ても、盲者の方が聾者よりも賢いことを示して居る。即ち昔から學術、美術、工藝に秀でた盲者は數へきれぬほどあるが、聾者では唯一人ベルチェルが文學上の著述を公にして居るばかりである。世人が人を誡めるのに、盲者のやうに勉めよ、盲者のやうに深く注意せよ、盲者のやうに細かに考へよと云ふほどであるが、聾者の方は甚だ痴鈍なものである。

耳の健全な者は決して久しく獨りて居ることはないが聾者は自然に人に遇ふことを厭ひ社交に遠ざかるものである。盲者は虫の音鳥の聲濤の音松風のひびきにも心を慰め人に遇へば談話をして一時でも其身の不具であること云ふことを忘れるが聾者は人が近づいて談話をしかけると云ふち自身の不幸を思ひ出して悲しさが包みきれぬものであつて聾者が盲者よりも常に鬱憂に沈んで居るのは全く之が爲である。

盲者には眼にうつる外界の活動はないが聾者には親しく語りかはす親交がない。故に若し盲者を譬へて一つの腕をもぎとられた者とすれば聾者は心臓の一部を切り取られたものと見るべきであらう。

外氣の溫度の影響

故に聾者は盲者よりも更に不幸であると云はなければならぬ。耳の聴えぬと云ふことは其人の爲すこと考へることに甚だ悪い影響のあるもので之が爲に誤解が起つてさまざまの悲劇を演ずる場合が決して少なくない。

外耳即ち耳翼外聽道鼓膜は常に外氣中に曝されて居るものであるから外氣の溫度の影響を受け易い。若し氣溫があまり高いと耳の内部に充血する恐がある。然し此外氣の溫度の高いのよりも身軀の溫度が昇ると云ふことは更に恐るべきものであつて之が爲に聽神經が甚しく侵されることとがある。醫師の中で麻疹猩紅熱痘瘡丹毒などの癒つた後に聾になつた患者を知らないものは恐くはあるまい。是は體溫の上つた爲に頭蓋の中に在る聽神經が障礙を受けた

耳の防禦

のであつて、微細の構造を有して居る聽神經は熱に由つて甚しい變化を受けることがある。寒氣殊に濕つぽい寒氣は、耳の病氣の起る原因となるものであつて、冬期に職業の爲に常に戸外に出て居る者は、耳病に罹ることが多い。此爲に露西亞、西比利亞などには耳翼の一部分の無くなつて居る者、又は全く耳翼を失うて居る者が少なくない。外聽道の溫度は、普通三十六度乃至三十六度五分である。若し外氣の溫度が甚だ低くなつて、外聽道の溫度が著しく減じたときには、鼓膜に炎症の起ることがある。外聽道には毛が生へて居て、空氣が此間を通る間に温められる。故に耳の毛を剃るのは此點から見てもよろしくない。

鼻加答兒

ことである。其他外聽道が彎曲して居ると云ふことも、直接に外氣が鼓膜にあたるのを防ぐ助となるものである。耳には人工的に被ひ物をして寒氣の爲に受ける害を避けることが出来る。然し此目的で健康な耳に綿の栓をするのは、あまり適當の方法と云ふことは出来ぬ。唯鼓膜が破れて孔のあいて居る病氣のある者は、防寒の爲に弛く耳孔に綿の栓をして置いて置いてもよい。耳囊は毛皮又は眞綿などで造つたものがよい。極寒の季節殊に風の強い日、早朝、夜間などの外出時には、此耳囊を用ひて、耳翼の凍傷、鼓膜の炎症などの起るのを防ぐがよい。兎に角、耳は右のやうにして、寒氣を防ぐことが出来るが、鼻腔の方は呼吸の道であつて、常に外氣を通じなければなら

氣壓の耳  
影に及ぼす

ぬから、寒氣を防ぐことが困難であつて、鼻加答兒に罹り易い人は、冬季に屢此症を發するものである。そして其鼻加答兒が咽頭からオイスタヒー管に蔓延し、中耳に迄及んで、中耳の加答兒を起すことがある。故に鼻感冒は、耳の保護の爲に注意して罹らぬやうにし、若し之に罹つたならば、外出を避け、手當を加へて早く癒さなければならぬ。

氣壓の變化も亦耳に害を及ぼすものである。平生は中耳の中の氣壓と外氣の壓とは平均して居るものであるが、其中のどちらかの氣壓に變化があると、鼓膜が内方又は外方に壓しつけられ、若し其變化が急で、劇しかつたならば、鼓膜の破れることがある。病氣に罹つて居る耳は、かやうな場合に破れ易いが、健康な耳でも矢張破れることがある。風船に乗

浴の注意

つて高い空に昇つた者、高山に登つた者などが、往々耳の出血を起すのは、外氣の壓が、空氣の薄くなつた爲に減じて、中耳の壓との平均を失ひ、其結果鼓膜が外方に壓されて破裂するからである。故に風船乗などは高く昇るに従うて折々水を飲むか、麵包を少しづつ、食べて嚥こむがよい。さうすれば、其高さ高さの空氣が、オイスタヒー管を通じて咽頭から鼓室にはいつて、外氣との平均を保つことが出来る。又之と反對で潜水器の中へはいつて深く水中に沈む者などは、外氣の壓が中耳内の壓よりも甚しく高くなつて、鼓膜が中耳の方へ壓されて破裂し、耳の出血を起すことがある。

耳の衛生上で最も注意しなければならぬのは、入浴、殊に海水浴のときの耳の保護法である。海水浴の爲には、耳の種々

海水浴  
病に起るの

の部分にさまざまの病氣を起すものであつて、嘗てエツツ  
リノが其經驗したところを統計して居るのを見るに之が  
爲に起つた病氣の種類並に數は次の通である。

- 耳翼の濕疹 六
- 單純の外聽道炎 四
- 皮脂腺炎及毛根炎 七
- 癬瘡 十一
- 外傷性鼓膜炎 十四
- 刺戟性鼓膜炎 十四
- 水のオイスタヒー管より浸入したる爲に起れる初 十一
- 發性中耳炎 七
- 鼓膜炎に續發したる中耳炎 十一

加答兒性中耳炎

二

急性オイスタヒー管炎

一

耳聾栓の膨大の爲に起りたる一時性の聾

三

既に罹つて居たる加答兒性化膿性中耳炎の海水浴

の爲に急性となりし場合 二十

殆ど治したる加答兒性中耳炎及化膿性中耳炎の海

水浴の爲に急性となりし場合 二十二

強き耳鳴 十七

此病名の中には素人の方にはどのやうな病氣であるかわ  
かり兼ねるのもあらうが、兎に角之に依つて海水浴が耳病  
の發生に著しい關係があると云ふことがわかることと思  
ふ。



全く健康な耳でも海水浴の爲に、外聽道、鼓膜、オイスタヒー管などの病氣を起し易いものであるから、まして既に耳病のある者が之が爲に其病勢を進めるのは云ふまでもないことである。化膿性の耳の炎症が水浴の爲に急性になつて、耳漏即ち耳から膿の出ることが一層甚しくなるのは、日常見るところであつて、往々之が爲に炎症が奥の方に進んで迷路に迄及ぶことがある。又慢性の中耳炎に罹つて居る者が海水浴をした爲に、甚だ強い耳鳴が起つて、我慢をして居られなくなつて、失望の極自殺を企てたと云ふ例を二三の耳科醫が報告して居る。

耳の骨の病氣に罹つて居る者は、殊に海水浴を誡めなければならぬ。腐骨疽に罹つて居る者が海水浴をすると益深い

海水浴の注意事項

其一  
其二  
其三  
其四

部分迄侵されるやうになり、其肉芽が茸腫のやうになることがある。

尚海水浴に就て注意すべきことを擧げて置かう。

(一) 耳には少しも海水浴の機能のないのみならず、却て之が爲に種々の病氣を惹起すことがある。

(二) どのやうな耳病でも、海水浴で治療しようとするは全く無益であつて、之が爲に耳病は一層悪くなり、或は最早癒りかかつて居た耳病が再發するものである。

(三) 海水浴の爲に起る耳の病氣のおもなものは、外耳の炎症、癩瘡、鼓膜の炎症、竝に鼓膜の炎症に次で起る中耳の炎症などである。

(四) 故に耳の病氣、殊に慢性の耳の病氣を持つて居る者は、海

其五

水浴をしてはならぬ。  
 (五) 耳の病氣を持つて居る者竝に嘗て一度耳病に罹つた者は、若し海水浴をして、水中を潜つてはならぬ。若し水中を潜らうと思ふならば、豫め綿か蠟かで、外聽道を密閉して置くと云ふことが必要である。  
 小兒を海水に浴させるときには、水が鼻孔や咽頭にはいらぬやう注意しなければならぬ。それは小兒が此水を嚥みこまうとするときに、オイスタヒー管の中へ水が侵入して、オイスタヒー管の炎症を起したり、中耳の化膿性の炎症を起したりすることがあるからである。  
 (六) 若し水が外聽道にはいつたならば、細い棒に脱脂綿を巻きつけて、四五分ばかり耳の中へ挿し入れて、水を吸ひ取ら

其六

せるがよい。そして其後に硼酸の粉末を耳の中へまき入れて置いたならば、之によりて残つて居た水が吸ひ取られ、且硼酸の爲に防腐消炎の效を奏して、炎症の起るのを豫防することが出来る。

其七

(七) オイスタヒー管に水がはいつて、まだ間のないものは、咳嗽、噴嚏をしたり、物を嚥下む運動をしたりすると、空氣が中耳にはいつて来て、水をオイスタヒー管から咽頭の方へ押し出すものである。鼻と口とを閉ぢて強く呼吸をする法竝に口に水を少しばかり含ませて置いて、其水を飲みこむと同時に、鼻から護謨球で空氣を輸る法を行つたならば、オイスタヒー管にはいつた水は、除かれるものである。此第二の法はポリッテルの法と稱へられるもので、オイスタヒー管に

其八

水が侵入してから、時が経つて、既に炎症の始まりかかつた時にも用ひてよいのである。然し既に鼓膜の急性炎が起つたならば、此法を用ふるのは危険である。それは之が爲に劇しい痛が起り、鼓膜に孔のあくことがあるからである。若し既に中耳に化膿性の炎症が起つたならば、醫師の治療を乞はねばならぬ。此時に醫師は、鼓膜を截つて中耳の膿を排泄させるものである。

中耳の化膿の爲に鼓膜の下の方に大きな孔があいて居たならば、硼酸の粉末をふりこみ、上の方に小さな孔があいて居たならば、硼酸を「アルコホル」に溶かしたものを滴らしこむがよいのである。

(八) 此硼酸の粉末、竝に其「アルコホル」に溶かした液は、外耳の

其九

炎症、疳瘡、鼓膜の炎症などに防腐劑として用ひて、甚だ效の多いものである。然しかやうな病氣は何れも等閑にして置いては危険であるから、手療治を試みないで、早く耳科醫を訪ふがよい。

(九) 若し醫師が患者に温泉療法を行はせようとするときは、必ずまづ以前に耳病に罹つたことはないか、或は現に耳病を持つて居りはせぬかと云ふことを聞き、糺さなければならぬ。殊に耳鳴、就中、金屬の響くやうな音、竝に鳥の囀るやうな音は、迷路の病氣の時に能く起るものであつて、入浴をした爲に、其耳鳴が甚だ強くなることがあるから、かやうな患者は温泉に送ることは出来ぬのである。

鑛泉殊に自然の熱泉は、皮膚、筋肉、關節の痲質斯性の病氣

には効があるが耳の病氣には少しも價値がないのみならず、鑛泉に浴した爲に、中耳に充血を起したり、耳鳴が強くなつたりする。

小兒を入浴させるときに、不注意で冷水を外聽道の中に入れることがあるが、是は甚だ害がある。

右のやうに水浴に就いて、くだくだしく述べたのは、世間に海水浴をする人と耳が強くなると思ふやうな間違つた説を信じて居る人が多いから、其誤解を正したいと思ふからである。耳病を癒したいと云ふ考で、海水浴をする者があると思ふことは、屢見聞するのである。加之醫師の中にさへ耳鳴のある患者に水治療法を命ずると云ふやうな無理をする者がある。

耳の妙薬のこと

耳と腦との關係

其他慢性の耳の炎症、咽喉の加答兒のある者に海水浴の有効を説く人があるが、それも甚だ悪いことであつて、通常海水浴をした後には、是等の炎症に罹つて居る粘膜炎は一層腫れて來るものである。

賣薬のやうないつも同じ處方の薬を、どの場合にも用ひて或病氣を癒さうと云ふ古い醫療の方法は、排斥しなければならぬことであつて、耳病の如きも、耳の妙薬と云ふやうなものを用ひて治療を企てるのは、甚だ危険である。耳病の患者は耳科醫が綿密に診察してからでなければ、治療をしては決して利益のあるものでない。

耳は職業に依つては、殊に休まず使はれ、過度に勞役に服するものである。又耳と腦とは密接の關係を持つて居るもの

塵埃の害

であるから、精神を勞する職業を執つて居る者は、腦の疲れると同時に、耳も亦疲れるものであつて、往々學生には重聽に罹つて居る者がある。

車夫とか職工とか云ふやうな塵埃の中で職業を執る者は、殊に外聽道を清潔にしなければならぬ。聽覺は通常極めて些細な原因で障礙の起るものであつて、工場内などで、始終粉末狀の塵埃が飛んで外聽道にはいると、其塵埃と耳聾とが混つて、外聽道壁又は鼓膜にくつついて刺戟をして聽道の炎症又は鼓膜の炎症を起し、遂には鼓膜の破孔を起すことがある。斯様な粉末狀の塵埃は、鼻や咽頭の粘膜炎を刺戟して、其部に加答兒を起させ、其加答兒がオイスマヒー管を傳うて中耳に迄蔓延するやうな危険なことがある。

刺戟の害

鉛の類を取扱ふ職業は、内耳の爲に有害なものであつて、鉛毒性の耳聾は往々見受けることがある。其他鑛夫、機械場の職工、砲手、汽車の運轉手などのやうな騒がしい響を聞き、高い音に接する者は、重い耳病に罹つたり、不治の重聽を起したりすることが多い。始終騒がしい場所、職業を執つて居る者は、丁度光線で、眼底の網膜上に分布して居る視神經が刺戟せられるのと同じやうに、内耳に分布して居る聽神經が絶えず刺戟せられて、遂には其麻痺が起つて音を感じなくなるのである。加之、砲手、機械職工などのやうな烈しい響に接する者は、空氣の強烈な振動の爲に、鼓膜の破裂を起すことが少なくない。尙鼓膜の裂傷のことは後に「注意すべき二三の耳病」の章で述べる。

職工の鼻加答兒

日本では聞いたことがないが、西洋には、耳のそばで大きな聲をして眠つて居る聴神經を醒めさせて、聾者が再び聴えるやうになる法があると云ふ廣告を出して、耳病患者を集めて居る者がある。然し是は山師の仕事であつて、實際そのやうなことが出来るものでない。又レオポルド、デスランデルと云ふ人が能く反響するやうに室を造つて、其中で大鼓を鳴らして、聾者の聴神經の管能を喚ひ起さうと企てた方法などは、一笑の價値もないのである。

職工は常に濕つぽい寒氣に曝されて居る者が多くあつて、之が爲に鼻加答兒を起し、其鼻加答兒がオイスタヒー管に蔓延して、空氣の流通を妨げ、或は中耳に迄及んで、其炎症を起すことが多い。殊に最も多く之に罹り易いのは、機械職工

鐵道事務と耳病と

竝に鐵道の驛夫などである。そして其病の原因が常に持續して居るから、追々病勢が重くなつて、全治すると云ふことは稀である。故に機械工場、鐵道廳などでは、常に此點に注意して其豫防法を講じなければならぬ。

種々の鐵道事故を生じ、甚しきは瀛車の衝突の如き大危険を起させる原因中の主となるものは、鐵道事務に従事する者の耳病と色盲とである。故に鐵道事務に従事しようと思ふ者竝に既に従事して居る者の耳鳴、重聽及眩暈などは、直に耳科専門醫の綿密な診察を受けると云ふ規定を設けなければならぬ。是は單に其人の衛生上の問題ではない。公衆の危険を豫防するに就て、最も重要な請求である。

重聽患者には、煙草殊に鯨ぎ煙草は大禁物であつて、鯨ぎ煙

煙草の害

草を使用した爲に、重い耳病を起した例がある。殊に煙草の過用は、オースタヒー管竝に中耳の頑固の炎症を惹起すことがある。嗜み煙草は、視神経に害のある如く、聴神経にも亦害のあるものである。

酒類の害

酒類を過度に飲用すると云ふことは、衛生上一般に禁じられて居るのであつて、耳にも害のあること勿論であるから、殊更に茲に論ずる迄もないことである。既に耳病に罹つて居る者は、酒類は絶対的に禁じなければならぬ。

音楽療法

人間の外界から受ける不快の感情は、耳の媒介によることが最も多い。故に神経病患者の治療に音楽を應用するのは、學問上適當のことであつて、有名なる巴里のシャルコーなどは、常に或種の神経病患者に音楽療法を行つて居る。

耳聾、耳塞のやうな最も軽い耳病でも、重い耳病と同じやうに、幻聴又は鬱憂症のやうな精神障碍を起す原因なることがある。

音楽家の

音楽家は音聲の力の強いと云ふことが大に必要であるが、聴覚が綿密であると云ふことは更に必要である。故に音楽家は耳の衛生には、最も注意しなければならぬ。

耳翼の形

耳翼の形に就ても注意しなければならぬ。是は容貌に關係するのみならず、聴覚にも關係がある。小兒の耳を帽子でひどく壓しつけるのはよろしくない。又帽を深く被らせて、耳翼を下の方へ壓し下げるのもわるい。又耳翼があまり立つて居るときには、毎夜繃帯のやうなもので頭へ壓しつけて置くがよい。あまり重い耳環を用ふると、耳翼の形がそこな

或は耳の形が  
或は耳の形が  
或は耳の形が  
或は耳の形が  
或は耳の形が

耳の一般衛生法  
婦人の衛生思想

はれる恐がある。

第五章 耳の一般衛生法

一家の健康上の注意に關する責任は、母の雙肩に懸つて居るものであつて、衛生上の知識は男子よりも女子の方が殊に必要である。女子は其家庭の健康を保護して、忠實な看護者とならなければならぬ。一國の文明は、其國の婦人の知識及道德的の教育と並行すると云ふことは、歴史の示すところであつて、婦人は家族の保護者たる天職を持つて居るのである。此天職を盡すには、穩健な精神を養成すると云ふ必要のあること勿論である。婦人は智力よりも情性の方が發達するものであるから、地理學を修め、外國語を學ぶよりも歴史、國語、博物學、殊に教育學を研究する方が、國家の爲にも

春機發動  
と耳病

家族の爲にも有益である。瑞西及合衆國などの貴婦人は、好んで衛生學並に醫學の初步を學ぶ習慣があるが、之は誠によいことであつて、我國の貴婦人たちも、衛生志想を常に養成せられて、之を日常の家庭に應用せられんことを切望するるのである。殊に小兒が病氣に罹つて褥に就いたときには、其母が一般の衛生の事に通じて居ると云ふことが、甚だ大きな力になるものであつて、之が爲に醫師が治療の便宜を受け、けることは、實に一通ではない。少年が春機發動期には、いる過度時代には、耳病に對して殊に危険である。是は統計上疑ない事實であつて、其原因を耳の弱い爲である、と云ふ人もあるが、それよりも此時代に於て、鼻咽頭に加答兒が起つて、往々之が爲に腺が肥大するか



らである。其他此時代に起り易い傳染病も、耳病の原因となり、百日咳、肺の病、氣管枝加答兒などの呼吸器病も、咳嗽の爲に機械的に耳を傷ふのみならず、之が爲にオイスタロ管から病原菌を耳内に輸つて、中耳の炎症を起させるものである。

耳の微毒

ベツオールドは小兒の傳染病竝に呼吸器病に罹つて居るときには、耳の検査をおろそかにしてはならぬと云うて居る。又嘗て微毒に罹つたことのある者は、其腦神經の官能を調べると共に、聴覺をも調べなければならぬ。微毒は好んで耳を侵すものであつて、壯年の時代に別に何の原因もないのに、忽ち重聽又は重い聾が起つたならば、まづ第一に微毒性ではないかと云ふ疑を起さなければならぬ。

一般の腺病質竝に遺傳微毒の爲に起つた腺病質は、少年時代に最も著しいものであつて、最も能く慢性の咽頭炎が起る。此慢性咽頭加答兒はオイスタロ管を経て中耳に傳はり易いものである。故に急性にしても、慢性にしても、鼻の炎症は決しておろそかにして置いてはならぬ。鼻加答兒はひとり耳病の直接の原因となるばかりでなく、「チフテリ」麻疹、猩紅熱などの傳染病の細菌は、鼻に加答兒があると、其場所て蕃殖し易いものである。凡て原因の如何を論ぜず、鼻加答兒咽喉加答兒に罹り易いものは、耳病にも罹り易いと云ふことは、統計上明らかである。

春機發動期には、他の諸機關と共に耳も亦發育して完全になるものであつて、此生理的作用の盛んなときに、若し耳

月經時と  
耳病と

の病氣に罹つたならば、其病的の變化も他の時期よりも強く、中耳の炎症が重くて、容易に肉芽が出来て、骨迄も侵されるやうになるものである。

鼻咽頭の慢性加答兒も亦春機發動期には、其經過が他の時期に起つたものよりもよるしくない。故に此側から見ても、春期發動期には、耳は危険に陥り易いものである。

耳病の治療は、今日してもらはなければならぬのを、明日迄延ばすと云ふやうなことがあつてはならぬ。殊に發育期の兒童の耳病は、此心得が大切であつて、少しの手遅れの爲に病勢の重くなることがある。

以上春期發動期に就て述べたことは、月經時にも適用することが出来る。元來婦人の生殖器と耳との間には、血管運動

妊娠と耳  
の病と

と姓と耳病

神経上で離れられぬ關係がある。故に耳病に罹つて居る婦人は、生殖器の機能の障礙に就て、特別に注意しなければならぬ。通常月經時には、既に罹つて居る耳病の症狀が多少悪くなるものであつて、中耳の慢性炎のやうな、營養的又は神經性の障礙のある者、竝に其變化が既に迷路迄廣つて居る者、中耳に化膿性の炎症のある者などは、月經の影響を受けることが著しい。

妊娠中に耳病が起ると、其耳病を妊娠の直接の結果だと考へる人があるが、それは間違であつて、外聽道の炎症を始め、其他の耳病でも、直接妊娠の爲に起ると云ふことはないのである。

男子と女子とは、耳病の性質と經過とに多少相違がある。一

神經症と  
耳病と

般に男子は耳病の病原となることから接することが多いから、女子よりも耳病に罹ることが多い。但少年時代にはまだ左様な差別はない。少女竝に年の若い婦人が耳病を訴へたならば、醫師はまづそれが「ヒステリー」性ではないかと云ふことを注意しなけはならぬ。又之と反對に神經病患者は、必ず耳の検査を忽にしてはならぬのである。一般の神經過敏症に罹つて居る者は、内耳の血管の神經に障礙が起つて、其爲に耳鳴を發することがある。世の母親たちは十分に以上述べたところに注意して、暫らくも忘れぬやうにありたいと思ふ。此耳の養生法にさへ注意して居られたならば、母子の心情を連結する綱であつて、

中耳病

耳病と  
關係

小兒の將來の發育に大關係のある大切の聽力を、病氣の爲に奪はれて、回復することの出來ぬやうな悲境に陥ることを免れ得らるるのである。加答兒性に化膿性の中耳炎の治療は、出來得るだけ速に始めるのが利益であつて、一日でも治療が延びれば延びただけ全治の妨げになる。そして若し全治することが出來ないときには、多少聽力が害せられると云ふことを免れ得ぬものである。中耳炎は既に時が経つて穿孔、肥厚、石灰化、萎縮、癍痕形成、癒著、強直などが起るやうになつては、到底全治の望がない。耳の腦に近い部分に炎症があると、腦に波及して腦膜炎や腦膿腫を起すことがあると云ふことは、誰にもわかる。そして

耳病と年齢

て其結果はどうかと云ふに、多くは死亡である。耳病を忽せにして置いた爲に、腦膜炎の犠牲になる小兒の數は實に驚くべきほど多い。耳漏は腦を清潔にする效があると云ふやうな愚説が、今尙世に行はれて居て、此耳漏が恐るべき腦の炎症の原因になると云ふことを知らぬ人が多いのは甚だ嘆かはしいことである。

たとひ中耳炎の爲に腦膜炎又は腦膿腫を起すと云ふやうな恐ろしいことがないにしても、尙其膿が卵圓窓並に橢圓窓の膜を破つて迷路を侵し、如何なる方法を用ひても癒ることの出來ぬ聾を惹起すことが屢ある。

耳病が治癒する數は、年齢と反比例をなして居る。即ち少年時代から青年時代迄に起つた耳病は殆ど全治し、少くとも

薬剤の耳を害するもの

著しく輕快する。但先天性の聾即ち腦の障礙の爲に起つたもの竝に聽神經の病氣で起つたものはさうは往かぬ。十五歳乃至三十歳に起つた耳病は、四分の三は癒るが、其餘は癒らぬ。それから年を取る程全く癒らぬ者竝に癒り難い者が益多くなる。

勿論老人の耳病の中にも、弛んだ皮膚の爲に外聽道が塞がるとか、オイスタヒー管が一時つまつたとか云ふやうな容易に癒るものもあるが、一般から云ふと、老人の耳病は癒り難い者が多い。

薬剤の中で、耳に對して有害の影響のあるものがある。其二を次に述べて置かう。

日常屢用ひられる藥で、耳を害する恐のあるのは「キニーチ」

と「ザリチール」酸とてあつて「キニーチ」の製劑竝に「ザリチール」酸の鹽類たとへば「ザリチール」酸曹達なども、矢張耳を害するものである。是等の藥劑はたとひ耳を害しても、病氣によりては是非共之を用ひなければならぬもので、他の藥劑では、代用の出來ぬことがあるから、耳の侵され易い患者には、成るべく之を少なく用ひ、又量を減することの出來ぬときは、成るべく用ふる時刻と時刻との間を長くするがよい。殊に多少聽神經の傷はれて居る患者は、是等の藥劑を用ふることを注意しなければならぬ。「ザリチール」酸はかやうの場合に、殊に迷路の充血を起し、其一部分の榮養を害し、遂には永久に其部分の組織が變化を受けて、甚しい重聽になることがある。

補聴器

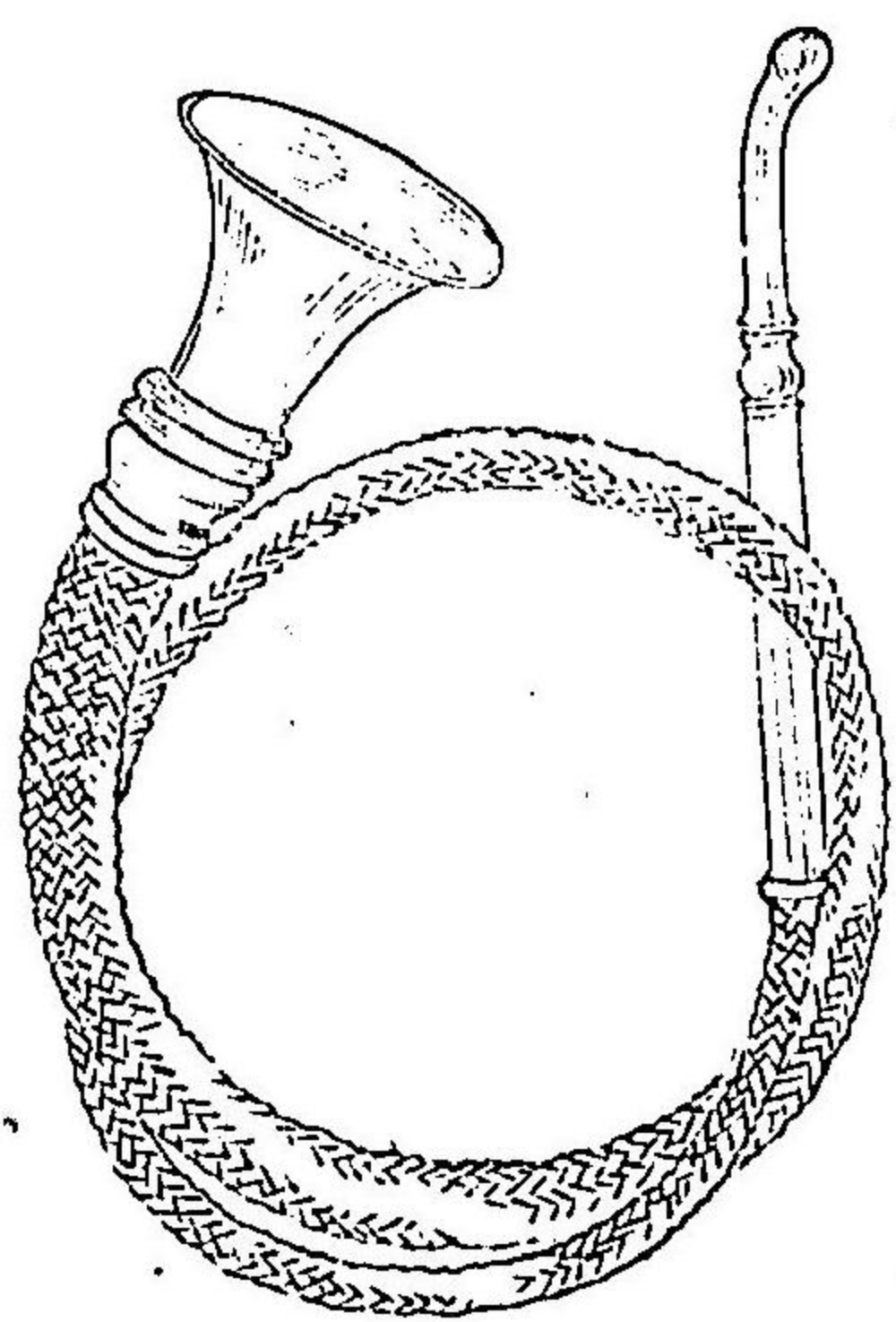
コツオリノの説に、自分は自分の診察して居る耳病患者が、治療中に耳鳴が増し、重聽の加つたときには、常に他の醫師が何かの爲に「キニーチ」を用ひたのではないかと想像して、之を糺して見ると、大抵推察の違つて居ることはない。そして自分の考では、此點に就ては「キニーチ」よりも「ザリチール」酸の方が有害らしいと云うて居る。

亞米利加で、腸の寄生蟲を驅除する爲に用ふる「セノボヂウム、フルミフギウム」と云ふ藥も、其使用中又は使用後に聾を起すことがある。

眼の近視遠視などを眼鏡で補ふのと同じように、重聽の患者に用ひて、其聽力の減少を補ふ機械がある。之を補聴器と名づけて居る。

補聴器には種々の形のものが出来て居るが、未だ完全のものはない。其原理は何れも、其器の一端の漏斗状になつて居る部に音波を集め、其管を通じて他の一端の細い口から耳に傳へるやうにするのである。音波は管中を進んで居る間は、其強さを減ぜぬものであるから、補聴器で導いた談話は、丁度耳の孔に口を持つて往つて話したのと同じ強さに聽えるわけである。補聴器の中で何れの種類を用ふるがよいかと云ふことは、其重聴の度と重聴の原因とに注意して定めなければならぬのであつて、醫師に撰んでもらうがよい。然し久しく補聴器を用ひ慣れて居るものは、自分で適當なものを撰ぶことが出来る。一般に云へば補聴器は形の小さいもの程、效能が少ない。若し補聴器を用ひて耳鳴が増すやう

なことがあつたならば、其使用を止め、或は成るべく使用を制限するがよい。



茲に圖に示した補聴器は、

ズンケルの創製したものであつて、螺旋状の銅線を心にして、之に糸を巻きつけた、長さ一メートルばかりの管の一端には口をつけ、他端には角製の漏斗をつけたもので、之を用ふるには漏斗の方の端を耳に挟み、開け

た方の口から話を入れるのである。其他補聴器には硬護膜製、橡革製、金屬製で種々の形のものがあるが、煩はしいから一々擧げないで置かう。

甚しい重聴者に、骨から聲を傳へさせる爲に、齒に金屬製の板などをあてて、之に向つて話す法を考案した人があるが、格別利益はない。

山師的の補聴器

巴里のワレリー兄弟は、其製造した補聴器を用ひたならば、如何なる重聴でも、二三箇月の中には必ず能く聽えるやうになる。と云ふ廣告をして、其製品を賣りつけ、患者も亦其補聴器の外觀の美なるに惑はされて、五、フランクを投ずる者が少なくない。と云ふことであるが、それは全く奸商の仕事であつて、其製品のやうな耳翼及外聴道よりも小さな補聴器で聽力を補うと云ふことは、學理上不可能である。加之外聴道を刺戟するから却て害がある。一つの眼鏡で凡ての眼の調節の障礙を補ふことが出來ぬ。

如く、一つの補聴器で凡ての重聴を補はうとするのは無理である。若も補聴器の必要があつたならば、まづ耳科専門醫の診察を受けて、其指圖通りにすると云ふことが最も必要である。さうしないと奸商等の廣告に欺かれて、無益の費用を出すやうなことがあるのみならず、残つて居る大切な聽力迄も失うてしまふことがある。

前に述べた巴里のワレリーは、自製の小さな補聴器は、中耳の慢性病の爲に重聴になつた者には、殊に效があると稱へて賣つて居るが、此器を耳にはめると却て外聴道を狭くして聽力を減ずるやうになつて、全く有害無効であるから、用ひてはならぬのである。

千八百八十四年に、バーゼルで開かれた萬國耳科學會に、

ルソールの子爵レオン、デム、レンハールが三千フランの懸賞で、重聴を補ふ爲に最も汎く應用することの出来る學理に適うた補聴器を募集することを献議して、其募集期限を千八百八十八年の九月と定めたが、其結果は甚だよろしくなく、審査の際に一つも目にとまるやうな進歩したものがなかつたので、更に其募集期を延ばしたと云ふことである。之に由つても完全の補聴器の得難いことがわかる。若し向後幸に良い補聴器を案出する人があつたならば、それこそ多數の憫むべき不具者を助けた恩人として、吾々はあらん限の感謝を捧げてよいのである。

音響が空氣から傳つて外聴道に入り、鼓膜を振動して、聴覺を起させるのを氣導と云ひ、普通音響のはいつて來る道で

あるが、其他音響は骨からも直に聴神經に傳はることの出來るものである。之を骨導と唱へるのであつて、たとへば時計を額にあてて、其音が明らかに聴き取られるやうなのが此骨導である。向後完全な補聴器を考案しようとするには、唯氣導の音波を集めるだけでなく、此骨導を利用する工夫をしなければならぬことと思ふ。今迄に考案せられて居る骨導の補聴器は、甚だ不完全で實用にはならぬ。唯之で醫師が骨導があるか無いかを調べて、耳病の診断及豫後のよいかよくないかを判断する助にする位のものである。

氣導に依る補聴器も、骨導に依る補聴器も、迷路竝に其部に分布する聴神經の末梢竝に聴神經の中樞が全く健全であつて、唯中耳又は鼓膜の病氣竝に機械的障碍の爲に起つた



重聴でなければ用を爲さぬのは勿論のことである。故に果して補聴器を使用するに適するか適せぬかと云ふことは耳科専門の醫師が診察した上でなければわからぬ。従つて遠方から患者に容態書を送らせて、それで重聴を癒すと云うて居る者は、山師でなければ詐欺師である。其他重聴に特效のある妙薬とか、耳油とかを吹聴して居る輩も、矢張之と同様の連中である。

醫師が治療を行つて效のある耳病は、通常中耳の病であるが、此中耳の病には薬劑を用ひても殆ど無益であつて、多くは器械的の療法に頼らなければならぬのである。唯薬劑を用ひてよいのは、中耳の炎症を減じようとする場合位のものである。

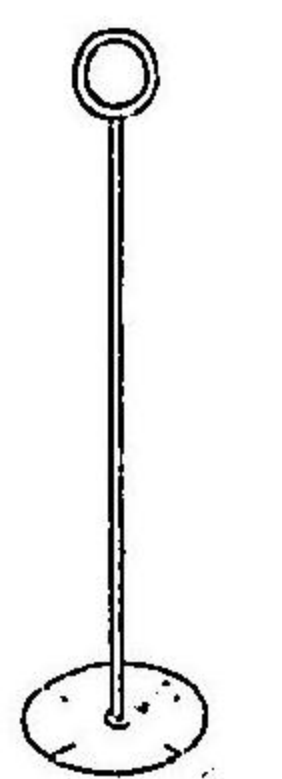
日本には他の病氣に就ては、種々の誇張的の治療法、賣薬などの大げさな廣告が、屢新聞に出て居るが、耳の病氣に就ては、まださやうの類のものが少ないやうである。西洋には前に述べた補聴器を始め、人工鼓膜とか、耳油だとか云ふ類のもの、誇大に廣告して、耳病者を欺き、金まうけを企てる奸商が、随分澤山にあるやうである。我國でもおひおひ耳病に就て注意する人が多くなると、必ず西洋と同じ風の奸商が現はれて來ることと思ふから、豫め用心せられんことを望むのである。

元來衛生の當局者は、病の自然の原因を豫防する務があるだけでなく、一般公衆の衛生に關する不正事件は力を盡して取締る責任があるのであつて、詐欺的の治療法無効の賣

人工鼓膜

薬などに就て、嚴重な處分を行はなければならぬわけである。人工鼓膜は、鼓膜又は聽骨が甚しく損傷して劇しい重聽を起し、そして其部分の炎症が既に去つて、分泌物が殆ど全く出なくなつてしまつて居るやうな場合に用ひて、往々重聽の輕くなることがある。其目的は之によりて多少音波の傳導を助けて、耳の傳音部の缺損を補はうとするのである。其最も古くから用ひられて居て單簡なのは、繃帶用の綿花を丸めて小さな球を造り、之を消毒し、慣れたる醫師が耳内を反射鏡で照らしながら、「ピンセット」に挟んで鼓膜の缺損部に迄輸るのである。

茲に圖に示したのは、トンペエの考案した人工鼓膜であつ



て、薄い圓形の護膜板にて造り、其中央に銀線の柄がついて居て、聽道内に出し入れをするに便利なやうになつて居る。是が最も汎く應用せられて居る。其他種々の人工鼓膜が出来て居る。

人工鼓膜は時としては甚だ效能があつて、今迄少しも話聲のわからなかつた重聽者が、之を用ふると、忽ち對話の出来るやうになることがある。然し之を續けて用ひて居ると、耳鳴眩暈が起つたり、或は止んで居た膿汁が再び現はれると云ふやうなことがあるから、成るべく必要のときだけ用ひ、おひおひ馴れさせ、よい中には知覺が過敏で、どうしても之を用ひて居られぬものがある。

人工鼓膜は醫師が適當と認めて、入れてくれる場合の外は

電話使用と耳の養生

決して無暗に用ふることは出来ぬのである。然るに西洋には例の奸商が非常に驚くべき發明で原因の如何を問はずして聲が全治すると云ふやうな大業な人工鼓膜の廣告をして居る者があるが、何れも前に擧げた人工鼓膜を模造したに過ぎぬのである。

齒痛を止める爲に刺戟性の藥劑を耳に注入する者があるが、それは甚だよろしくない。其他冷水又は他の冷たい液體を耳に注入するのも害があるから、若し注入する必要があるつたならば、まづ微しばかり温めなければならぬ。往々唯微温湯を注入しただけで耳痛の止むことがある。

(一) 電話使用と耳の衛生との關係は次の通である。

耳病の統計並に原因

い。然し若し耳に病氣があると、有害の影響を被ることを免れぬものである。

(二) 耳病の電話使用の爲に受ける害は、聴力の減ずること、耳鳴、頭痛、眩暈、神經疲勞、一時性の精神障礙などの起ることである。

(三) 然し右のやうな障礙は、電話の使用に慣れるか、或は電話の使用を廢めたならば消えてしもふ。

第六章 耳病の統計並に原因

耳病の数は甚だ多いものであつて、トルツの説に由ると、二十歳から五十歳の者が三人寄ると、其中の一人は必ず多少一耳の聴覺が傷はれて居る割合になつて居ると云ふこととである。ライヒハルトが袖時計で小兒の聴覺を調べた成

兒童の重  
聴數

績によると、兒童千〇五十五人中二十二・二布仙は重聴であつたと云ひ、ワイルがスツツガルトて五千九百〇五人の小兒に就て檢べた結果では、男子は十一布仙、女子は十五・一布仙、重聴であつて、其中に鼓膜が内方に向て凹んで居る者が男子の八・二布仙、女子の六・〇布仙、耳漏即ち耳から膿の漏れて居る者が男子は一・九布仙、女子は二・三布仙、石灰の沈著して居る者が男子は一・五布仙、女子は〇・九布仙あつた。一般に生活の高い家庭の兒童の來て居る學校は、貧民の學校に較べると重聴者が少ない。又ベツォルドはミンヘンで三千八百三十六人の耳を檢べたが、其中千九百十八人は學校の兒童であつて、耳の健康な者が七十九・二五布仙、耳を病んで居る者が二〇・七五布仙であつた。前にも述べた通學校兒童の重聴

學校の重聴兒童  
の學年と數

性との耳病  
係數との關係

耳病の類  
別

は自身教師友人共に氣付かずに居ることが多い。又ベツォルドの調べたところによると、重聴に罹つた學童の數を學年に別けて較べて見ると、學年の加はる程重聴者の數が多くなるのみならず、其度も強くなると云ふことである。

一般の耳病患者を統計して見ると、男子の方が女子よりも多い。其比例は凡そ男子三人に就て女子二人になつて居る。それから、耳病を類別すると、總數中で外聽道の病氣に罹つて居る者が二十五布仙、中耳の病氣が六十七布仙、内耳の病氣が八布仙である。ベツォルドの説に依ると、小兒の耳病の過半数はオイスタヒー管の病氣に原因して居るものであつて、神經性の重聴は大人に在つては九十三・一布仙を占めて

耳病の原因

居るに拘らず小兒に在つては六・九布仙に過ぎぬ又小兒は鼓膜に孔のあかぬ中耳の慢性病を持つて居ることは少ないと云ふことである。

耳病の患者にいつから病氣になつたかと聞くと風をひいてから悪くなつたと答へる者が甚だ多い。此患者の答は事實であつて隙間の風冷水などのやうな寒氣を受けた後に直に鼓膜又は鼓室の急性炎を起すこともあり又鼓膜又は鼓室の慢性の炎症に罹つて居る者が此爲に病勢を増して急性になることもある殊に行軍の時などのやうに屋外に露臥して強い寒氣を受けたときには迷路に炎症を起して忽ちに聾になつてしまふことがある。

健康の耳は通常の寒氣ならば保護する必要はないが強い

寒氣

類鼻咽喉の

寒氣又は烈風の際には綿の塊であまり固くないほどに聴道に栓をして置くがよい。小兒は耳翼をも共に覆うて置くがよい。此防寒の用意は炎症に罹り易い體質の者には殊に必要である。水浴に就ての注意は既に前に述べた通りである。容易に感冒に罹る者は常に毛織の襦袢を着け冷水にて皮膚を摩擦し或は冷水浴を行ひ新鮮なる空氣中で仕事をさせ勉めて身體を練らなければならぬ。既に加答兒に罹つて居る者竝に加答兒を起しさうな疑のある者は酒と煙草とを用ふることを禁じ濕つぽい空氣及塵埃の多い空氣を避けさせなければならぬ。

小兒は鼻咽喉の類鼻咽喉の爲に重聽に罹る者が甚だ多い。十五歳迄の小兒の耳病の四十布仙は此原因で起つたもので

急性傳染病

あると云ふことである。此類腺腫は醫師の手術によりて截り取つてもらはなければならぬ。

「インフルエンザ、麻疹、猩紅熱、チフテリ、耳下腺炎、チフス、痘瘡などの急性傳染病の爲に耳病の起ることが甚だ多い。之が爲に起る耳病の中で最も多いのは、單純の中耳の加答兒である。小兒が急性傳染病に罹ると、甚だ耳病を起し易いものであるが、大人は小兒程多くない。哺乳兒が肺炎に罹つたときには、殆ど皆耳病が起る。レノン、五歳未滿の「チフテリ」患者の八十二布仙は耳病を起すと云ひ、ゲスレルは猩紅熱の四十七、七布仙、ハルトマンは發疹「チフス」の三十二、三布仙は耳が損はれると云うて居る。傳染病の爲に起る耳病の重い者は全く聾になることがある。殊に猩紅熱及チフテリの

百日咳

微毒

心臟及肺の病氣

腺病

腦病

ときには此恐がある。

百日咳に罹つて居る者が迷路の充血の爲に俄に聾になることがある。又結核、白血病、微毒が耳を侵すことがある。微毒は先天性の者よりも、後天性の者の方が、屢耳を侵すものである。又は先天性微毒は主に迷路の病氣を起すものである。種々の心臟病竝に肺氣腫などのやうな血行を礙げる病氣は、耳の機能に影響のあるものであつて、或は新たに耳病を起し、或は既に罹つて居た耳病の癒るのを妨げる。

腺病性の小兒は、耳病を起し易いものであつて、起れば健康の小兒に較べると容易に癒らぬ。

耳の病から腦の病の起ることがあると云ふことは、既に前

反射性耳病

遺傳

豫防法

に述べたが之と反對で、腦の病氣から耳の病氣を起すことがある。又耳と連絡のない病氣の爲に、反射性に耳の病氣の起ることがある。たとへば齒の病氣の爲に、耳の炎症又は神經痛の起ることがある。

中耳又は迷路の慢性病の中に遺傳するものがあつて、往々一の血族中に、若い時又は年取つてから重聽に罹る者を多く見ることがある。ベツオールドの實驗によると、中耳病患者五百人中四十三布仙、内耳病患者三百八十八人中二十八布仙は遺傳性であつたと云ふことである。

耳病の豫防中で最も必要なのは、早く適當の治療を受けて、急性症が慢性症にならぬやうにすることである。耳病の中には、たまには如何に治療に力を盡しても、其病勢を挫くこ

耳病の症候

第七章 耳病の症候

との出來ぬものもないが、多くは適當の治療を加へたならば、治し得るのである。殊に中耳の膿性炎は、其初めに注意しないと、慢性になつて容易に癒らず、甚しい重聽になり、遂には全く聾になることがある。加答兒性の中耳炎も等閑にして置くと、手がつけられなくなる。

耳鳴は耳の病氣に罹つて居るときに屢起るものであつて、其耳鳴の性質、強さ、起る模様などは甚だ様々である。或は極めて弱くて、よほど注意せぬとわからぬこともあれば、随分劇しくて、非常に病人を苦しめ、其安眠を妨げることもある。尙劇しい耳鳴になると、病人が苦しさに堪へないで自殺を企てることさへある。

耳の聾鳴

耳鳴に、迷路の聽神經の末梢竝に腦の聽神經の中樞の刺戟(其部の血行の變化及炎症)によりて起るものと、中耳竝に其周圍に起つた雜音が聽神經に達するものがある。此雜音が高いときには、耳を診察して居る醫師にも聽えることがある。此雜音ある。此雜音は耳の血行筋の收縮鼓室に溜つた液の運動などの爲に起るのであつて、耳の共鳴が増したり、聽神經が過敏になつたりしたときには、此音を高く感ずるのである。耳鳴は其性質によりて次のやうに區別する。

(一) 耳の聾鳴 之は調の高い音であつて、蟬の鳴くやうな音、虫の鳴くやうな音、歌ふやうな音、湯の沸騰するやうな音などが此部類である。斯様な耳鳴は健康の耳にも偶然起ることがある。又眼瞼を閉ぢるときに、聾鳴の起ることがある。鼓

膜の破れた患者の治療のときに、中耳に器械などが觸れると此音を發することがある。又劇しい爆發の響などを受け、た後にも、高い聾鳴の起ることがある。或音樂家の迷路病に兼ねて中耳加答兒に罹つて居る者が、甚だ強い聾鳴を發して、其聾鳴の起つて居る間は、オルガンの之に一致して居るの音は、甚強く弾じなければ、感ずることが出来なかつたと云ふことである。

耳の聾鳴の起る病氣は、聽器の充血竝に急性慢性の加答兒であつて、殊に迷路も共に病んで居る者は、之を起し易い。此耳鳴の起るのは、迷路の神經纖維が刺戟を受ける爲であつて、丁度眼が充血したり、壓迫を受けたりすると、光の感覺が起るのと同じ理である。



耳の鐘鳴

(二) 耳の鐘鳴 之は調の低い音であつて、戦く聲、松風、濤の音などのやうな耳鳴が此部類である。此耳鳴は腦の腫瘍、迷路の病氣、及中耳病で聽神經までが侵されて居る症には、聽神經の刺戟の爲に起るものであるが、多くは神經器に接して居る血管又は筋肉に起つた雑音が神經に傳つて、此耳鳴を發するものである。此耳鳴は多くは耳の共鳴の加つたときに起る。即ち外聽道が聳聳又は、ポリウペン(莖)を持つて居る腫物)などで塞つたとき、分泌液が聽道又は鼓室に溜つたとき、起り易いのである。

(三) 諸種の内響 中耳の中に溜つた分泌物が動く爲に起ることが最も多い。此耳鳴はざらざら、びちびち、ぐるぐる、ぶつぶつなど云ふやうに感ずるものである。人によりては口腔

諸種の内響

幻聽

の奥の口蓋弓筋を收縮させて、隨意にびちびち、ぶつぶつなど云ふ耳鳴を起し得る者がある。

(四) 幻聽 稀には律に適うて居る曲の節が聽えることがある。是は恐くは大腦の刺戟の爲に起るものであつて、他の精神的の症狀のない一種の幻覺と看做すべきものであらう。其曲の節は患者の記憶して居らぬもの、又は少しも知らぬものが聽えることがある。眞に存して居るのでない人の言葉、蛙の聲などが聽えるもの、やはり此曲の節が聽えるのと同じ種類である。多くの「キーネ」を用ひた後、竝に腦溢血の患者が、曲の節の幻聽を起したのを實驗した人がある。ハルトマンは嘗て音樂に通じて居る一婦人が甚しい神經性の重聽に罹つて、多くは嘗て聽いたことのある極めて優美の

曲の節の幻聴を久しい間感じ、其病症の進むと共に種々の節が混じ、遂には其間に不調の音を聞くやうになつた者を實驗したことがある。

以上挙げたやうな耳鳴は、往々外から刺戟を與へた爲に變化することがある。乳嘴突起竝に第一頸椎の部分を壓迫すると、耳鳴が一時又は續いて軽くなり、或は全く消えてしまふことがある。或は外聴道に空気を吹きこんだり、電氣を通じたり、音響を用ひたりして耳鳴を變じさせることが出来る。と稱へて居る人がある。ルセは神経性の耳鳴は外から來る音響によりて増すものと減するものがある。と云ふことを認め、音響の爲に耳鳴の加はるものは音響を遠ざけ、減するものは音響を其治療に應用することが出来る。と云ふ

て居る。

耳鳴のいつも平等にあつて斷へることのないものは、癒り難い。時々強さが變つたり、全く聴えなくなつたりするものは癒る見込がある。オイスタヒー管から空氣を中耳に通じた爲に軽くなる耳鳴は、豫後がよい。又外聴道の氣壓を減じて、軽くなる耳鳴は、鼓膜の緊張の異常の爲に起つたのであつて、之も癒る見込がある。

耳鳴及之と共に起つて居る重聴で、食物を取つた後、酒類を飲んだ後に輕快するものがある。是は迷路の貧血の爲に起つたものである。

耳鳴の爲に精神の損害、幻覺、鬱憂、狂などを起すことがある。凡て耳病は精神病を惹起し易いものであつて、殊に精神病

の素因のあるものは、其處がある。然し斯様の精神病は、大抵  
 耳病の癒るに從うて癒ることが出来るもので、錯聽を起し  
 て居るやうな重い精神病が、聾聵栓を除いた爲に癒つたと  
 云ふ例がある。

眩暈に  
 體位の  
 權衡に  
 失常

眩暈に體位の權衡失常(身體のぐらつく症)が、或耳病のと  
 きに、耳鳴に嘔心嘔吐と共に起ることがある。  
 冷水が鼓膜に觸れると、眩暈に悪心嘔吐が起るが、温水が  
 觸れても、又氣壓が外聽道に加つても、そのやうなことはな  
 い。又少し温度の低い水を耳に注いでも、眩暈の起ることが  
 ある。  
 鼓膜又は鼓室壁に異物、聾聵が懸つて居る爲に、眩暈症の起  
 ることがある。

強い「ジレネン」音の起る樂器の爲に、眩暈、悪心、竝に耳に歌ふ  
 やうな耳鳴を發することがある。又狼烟のやうな強い音響  
 ても之を發することがある。  
 人が迷路に傷を受けると、劇しい眩暈と體位の權衡失常と  
 が起る。嘗て誤つて、鼓膜の後上部から迷路の方へ縫針を刺  
 しこんだ者があつて、之か爲に忽ち卒倒して臥床に擔ぎこ  
 まれたが、其後二日ばかりの間は、ちよつと體を動かしても  
 烈しい眩暈がして、始終嘔吐し、耳鳴が甚だ強く、重聽が起つ  
 て、後漸次快復したものを、ハルトマンが經驗したことがあ  
 る。動物の内耳の半規管を切斷すると、體位の權衡失常を起  
 すものである。  
 エワルドの精密な試験によりて、迷路は筋の緊張を調節す

過敏神經の

ると云ふことがわかつたのである。故に迷路を取去つてしまつたならば、最早中心神経系が筋の緊張を保つことが出来なくなつて、眩暈が起り、脚がぐらぐらする。かやうな状態は迷路の刺戟又は損傷の爲にも起り、腦の損傷によりても起る。

耳病の際に聴神経の知覚が過敏になることがある。此場合には耳の音を感じることが、健康の耳よりも敏く、或は音を感ずるときに痛が起る。晋書列傳五十四に、晋の陳郡人殷仲堪の父が嘗て耳聰に罹つて、牀下で蟻の動くのを聽いて牛が鬪つて居るのと思つたと云ふことが書いてある。

聴神経の感覚が過敏になるのは、概ね腦の病氣の爲であつて、多くは他の神経にも過敏になつて居るものがある。ヒス

錯聴

テリー及神經衰弱症の中に、非常に聴覺の鋭敏になつて居ることがある。ルセは顔面神経の麻痺して居る者で、非常に鋭敏に音樂を感じるので見たと云うて居る。

音響の爲に痛を感じるのは、唯二三の音竝に雑音に限るともあれば、どの音でも痛むこともある。そして此痛は甚しい重聴の者にも起ることがある。

聴神経の知覚が過敏になるのは、其感受性が増した爲であつて、之を防ぐ爲には、軟膏を塗つた綿で外聴道を塞ぎ、或は護謨製の帽のやうなもので塞いで置くがよい。

又耳病の中に音響を聴き取ることを間違へるものがある。之を錯聴と名づけるのであつて、音が健康の人の耳に聽えるのとは、違つて聽えるのである。又一方の耳だけが病氣に

複聴

懼つて居ると、健康の耳は正しく音が聴えるが、病耳の方は高く聴えたり、低く聞えたりするから、一つの音が二つのやうな感じがする。此症を複聴と名づける。

錯聴は概ね中耳の急性炎に續發するものであるが、其他の中耳病及迷路病にも起ることがある。其原因は聴神経の纖維の緊張の變化の爲である。

稀に重聴に懼つて居る者が、騒がしい所へ往くと却て聴覺を増す症がある。かやうな患者は、汽車又は其他の車に乗つて居るとき、賑はしい街路を通るとき、額に整調叉を立てたときなどに、能く人の談話を聴取ることが出来て、其聴覺を調べて見ると、靜かなところで測つたよりも頗る増して居る。井ルリスは、或男子が其妻と談話をしようとする毎に必

獨聴

聴覺の検査法

すまづ太鼓を鳴らす者があつたと云ふことを報じて居る。』

聴覺の異常の一つに獨聴と稱する症がある。是は自身の出した聲が、丁度耳の中へ叫びこまれたやうに強く感ずるものであつて、稀に見る症である。此症はオイスタヒー管が開き過ぎて、自身の聲が自由に鼓室にはいつて、強く鼓膜を振動する爲に起るのであつて、聲が非常に高く、且一種の響を帯びて聴えるから、患者が甚だ不快で、低い聲でなければ話すことが出来ぬ。甚しきは話すときに痛を感ずることがある。又黙して居るときでも、呼吸するたびに、空氣が鼓室に入して、やはり不快である。

第八章 聴覺の検査法

耳が健康であるかないかと云ふことを知るには、聴覺が完

聽界

全であるかないかと云ふことを検査しなければならぬ。又耳が病氣に罹つて重聽になつて居る者のどの位聽覺が衰へて居るかと云ふことを知るにも、やはり検査法によりて聽覺を調べなければならぬのである。

聽覺を検査するには、検査用の音響を強くしたり弱くしたりして、それが幾何の距離で検査して居る耳にやつと聞えて、夫よりちよつとも遠くすれば聽えぬやうになるかと云ふこと、即ち學問上の言葉で云へば、音響の聽界を知るのである。検査に用ふる音響を強くするには、發音器を強く振動させるか、或は之を耳に近づける。今日では、まだ各種の音響を始終同じ強さに發せしめる器械がないのであるから、此聽覺試験も理學上から見たならば正確と云ふことは出

音響傳達の道

氣導の障

來ぬ。加之たとひ聽覺の度が同じであつても、聽覺の検査を施すときの被検査者の注意年齢聽覺の疲れて居ると居ないと、竝に室の模様他に雑音のあるとないとなどで、成績に著しい相違が起るから、検査者は常に之に注意しなければならぬ。

前にも述べた通り、外で起つた音響の波動が内耳に達して聽神經の末梢を刺戟して音の感覺を起させるには、二つの道がある。其一つは音響の波動が空氣に傳つて聽道にはいり、鼓膜に至り、更に聽骨を傳うて迷路に達するものであつて、之を氣導と稱へ、他の一つは音響が頭の骨を傳うて直に迷路に達するものであつて、之を骨導と名づける。

聽覺が完全であるときには、耳の音響を傳へる部分即ち鼓

膜、聽骨、鐙骨の輪狀靱帶、中耳と内耳との間の卵圓窓に張つて居る靱帶は何れも微細の振動を起すものであるが、此振動が礙げられると、聽道にはいつて來た音波が十分に迷路に達することが出來ず、従つて多少氣導の聽覺が傷はれる。此振動の礙げられる場合は、鼓膜の緊張の有様の變つたとき、鼓膜の一部の缺けたとき、聽骨と鼓室壁とのくつついたとき、鼓室に液の溜つたとき、輪狀靱帶が肥厚又は化骨したときなどである。但かやうな場合には、頭骨と迷路液との緊張の加はる爲に、骨導の聽覺は却て増すものである。健康の耳では、音響を傳へる力は、氣導が骨導に勝つて居るのであるが、傳音器に甚しい障礙があるときには、氣導の聽覺は殆ど無くなつて、骨導の方が残つて居ることがある。

袖時計を用ひて聽覺を測る法

元來健康と病氣との間には、はつきりと界が立てられぬと同じで、聽覺の尋常なものと、重聽の輕いものとの區別は甚だむつかしい。然し聽覺を測るには、此區別が必要であるから、検査者は標準とすべき尋常の聽覺の程度を定めて置かなければならぬ。今其標準となるものを順次に擧げて置かう。

(一) 袖時計を用ひて聽覺を測る法 成るべく音の強い袖時計を撰び、豫め健康の耳に就て、まだ其音が明かに聴き得られる最も遠い距離之を聽距と稱へるを定めて置かなければならぬ。さて之を用ひて病氣に罹つて居る者の聽覺を檢べるには、初めに健康の耳が聴き得た距離たとへば耳から二メートル距てたところに置き、それから漸々耳に近づけて、明かに其音を聴き取り得られる所迄持つて來て、其距離

を測り之を健康な耳で測つたときの距離と比較して、どの位聴覚が減じて居るかと云ふことを見るのである。今健康の耳の此時計の聴距が二メートル三百仙迷で、病耳の聴距が三十仙迷であつたならば、此病耳の聴覚は、健康の聴覚の  $\frac{300}{2300}$  である。若し病耳が此時計を耳に觸れて初めて其音を聴き得る程に重聴であつたならば、其聴力は  $\frac{100}{2300}$  であつて、耳に觸れても尙聴えなければ  $\frac{100}{2300}$  である。骨導の聴覚を袖時計で測るには、之を颞顳骨又は乳嘴突起(耳翼の後ろの隆起したところ)に觸れるがよい。此袖時計で測つた聴力と、次の話聲で測つた聴力との比例の一致せぬことが間々ある。殊に高齢の者にはそのやうなことが多いのである。

話聲にて聴覚を測る法

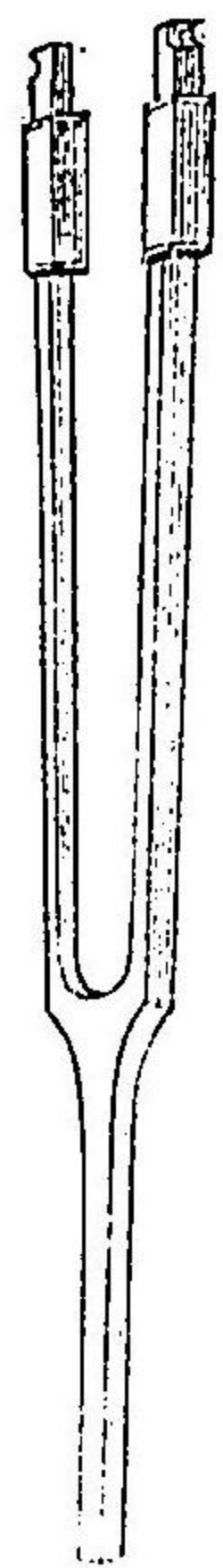
(二) 話聲にて聴覚を測る法 此法が種々の検査法の中で最も必要である。何故ならば、耳の第一番必要なのは、話を聴くと云ふことであつて、重聴者の希望も談話を明かに聴き得たいと云ふ外はないのであるから、話聲で聴覚を検査して、其話聲を理解する模様、竝に健康者と相違の點などを知るのには、最も参考になることであるからである。オスカル、ナルフが此検査法を研究してからこのかた大に進歩したのであつて、其説によると、凡て母音は子音よりも音が強く、子音に較べると、距離が遠くても、能く聴き取ることが出来る。又子音の中にも、音の強いものと強くないものがある。斯様に聲音は其強さが各大に異つて居るやうに、音質も亦互に異つたところがある。



聴覚の検査には耳語を用ふるのがよい。高い聲を出す時、母音が子音を掩うてしまふから、母音ばかり聴えて、重聴者は却て聴取り難い。日常重聴者と話をするに、無暗に大きな聲をして聴えぬのは、此理によるのである。健康な耳は、たとひ近所に多少雑音があつても、耳語を二十乃至二十五メートルの距離で聴くことの出来るものである。聴覚の良いものは、調の低い耳語で検査し、悪いものは、甚しく抑揚をつけた話聲、又は高い話聲を用ふるがよいのである。話聲を用ひて聴覚の検査を行つたならば、重聴者が健康な耳で感じ得らるる種々の聲音を能く感じ得るか、感じ難いか、或は少しも感じ得ぬかと云ふことを定めることが出来る。

ベツォルドは聴覚試験に一から九十九迄の數字を用ひて、十位又は一位の数の四、七、五、九などの誤り易いものを明かに聴きわけ得るところまで進んで、其距離を測る法を用ひた。話聲で聴覚を測るときに、検査者の口を見せると、たとひ聲は聴えないでも、唇の動きかたで言葉を悟つて、検査者を誤らせることがある。又健康な耳は、たとひ如何に密閉しても、骨導によりて、多少聴くことが出来るものであるから、一方の耳だけが甚しい重聴に罹つて居る場合の聴覚検査には、之に注意しなければならぬ。時計は割合に老人には聴え難く、小兒には計測に不便であるから、何れも話聲で聴覚を測るがよい。話聲の高低を測る爲に話聲計と云ふものが出来て居て、之

整調又を  
検査する  
法



又或は之を音叉と呼んで居る者があるを音叉と呼んで

に向うて聲を出したならば、いつも同じ高さの聲で聴覺を  
試験することが出来る。  
(三) 整調又を用ひて聴覺を検査する法 上圖のやうな整調  
らば、精密に聴覺を試験することが出来る。それは話聲並に  
袖時計は雑音であるが、此器は正しい音を發するからであ  
る。耳が能く各種の音に感じ得るかどうかと云ふことを調  
べるには、數種の整調又を用ひなければならぬ。其試験法は  
時計を用ひるとき、のやうに強く打つた整調又の音を幾何  
の距離迄聴くことが出来るかと云ふことを測るのである。  
之にて骨導の聴覺を測るには、乳嘴突起の部分に立てるの

耳の洗滌  
法

第九章 耳の洗滌法

である。

耳に異物、疳癬塊のあるのを取出す爲に耳を洗ふには、スポ  
イトを用ひて、聴道の上壁又は下壁に向ひて、微温湯を注入  
し、其液が異物又は疳癬の後ろに廻つて、之を外の方へ押し  
出すやうにしなければならぬ。  
又分泌液、膿などを洗ひ出すには、「イルリガートル」を用ひ、嘴  
管にて其水流を耳内に導いて、あまり強くなく洗ふがよい。  
患者が獨りて洗ふには、護謨球に護謨の嘴管のついて居る  
ものを用ひたならば、誤ちて耳を傷つけるやうな恐がない。  
流れて出る液は、耳翼の下に膿盤などをあてて、それへ受け  
るがよい。

耳内を洗ふ間は常に左の手で耳翼を撮んで後外方に引張つて聴道の曲つて居るのを真直にしなければならぬ。凡て耳の洗滌に用ふる液は血液と同じ温度に温めなければならぬ。冷水を用ふると眩暈や嘔氣を發することがある。唯聴道にある物を洗ひ出すには一度煮立てた常水を用ひ、鼓室に病のある耳には四分の三布仙の食鹽水又は消毒劑を用ふる。消毒劑の中で用ひられるものは、硼酸、サリチル、酸、石炭酸の百倍の溶液、千倍の昇汞水などである。永い間出来て居て數回洗うても除かれぬ聾は注意して消息子などで其位置を換へさせて更に洗うて見るがよい。或は五十倍の炭酸曹達水などを滴らしこんで、聾を軟らげた後に洗ふがよい。

鼓室に空  
氣を通ず  
る法

耳を洗つた後に、耳内の液を除くには、頭を傾けさせて流れるのを拭き取り、尙残つて居る液は、小さな棒のさきで脱脂綿をつけて、注意して耳内にさし入れて吸ひ取らせるがよい。

第十章 鼓室に空氣を通ずる法

鼓室に空氣を通ずる法、即ち通氣法は、醫師が耳病を診察するに最も必要なばかりでなく、耳病の治療上にも屢應用せられるものであつて、素より醫師の行ふべきことではあるが、其三種の方法の中の二法は、素人にも出来ることで、醫師が、遠方の患者などには、自宅で、行つて命ずることがある。加之、其方法竝に耳に働く状態は、素人が知つて居て有益且趣味のあることと思ふから、茲に大要を説明して置くこ

通氣法の作用

とにする。  
 通氣法には次のやうな作用がある。  
 オイスタヒー管の壁は互に相接して居るものであるが咽頭から氣流を輸ると容易に其壁を壓開いて中耳に達することが出来る。故にオイスタヒー管が腫れて居るとか、分泌物が溜つて居るとか、物を嚥下むときの運動をしても、空氣が通じなくなつて居るときに、通氣法を行つと、能く管が開通する。感冒などのときに、重聴になつたり、耳鳴がしたりするのは、咽頭の加答兒がオイスタヒー管に迄蔓延して管が腫れて通じなくなる爲であつて、之に通氣法を施すと直に耳鳴が止み、重聴が快復する。若しかやうな場合に管の中に分泌物があつたならば、其咽頭に近い部分のものは咽頭

に、鼓室に近い部分のものは、鼓室に輸られて、管から除かれるものである。此通氣法の作用は、之を行ふ間だけでなく、後迄も效力のあるものであるから、反覆して行つて居ると、管の狭窄、腫脹、弛緩などで不通になつて居るのを癒すことが出来る。  
 通氣法によりて輸られた氣流が鼓室にはいると、鼓室の氣壓が高くなるから、鼓膜は外聽道の方へ壓迫せられ、槌骨も亦之に伴うて外方に移り、其他の聽骨もいくらか動かされる。故に鼓室の空氣が薄くなつて、鼓膜が甚しく内方に窪んで緊張し、聽骨も亦内方に壓されて居て、之が爲に其振動が妨げられ、音響の傳導が悪くなつて、重聴に罹つて居る症には、反覆して通氣法を行つて、鼓室に氣流を輸ると、漸次鼓膜

が弛緩し、聽骨も尋常の位置に復してもとの通に振動し、重聽が快復するやうになる。此通氣法の作用は、鼓室のみならず、迷路にも及び、迷路の壓迫を除き、其爲に起つて居る重聽竝に耳鳴を癒すことが出来る。

中耳に分泌物が溜つて、鼓膜の破れて居るときに通氣法を施すと、其分泌物が外聽道に押し出されて除かれるが、若し鼓膜が破れて居ないときでも、通氣法の爲に中耳の分泌物が吸収せられて、追々に減ずるものである。

ワルザル  
法の通氣

(一) ワルザル法の通氣法 之は極く簡單で、口と鼻とを閉ぢて居て、強い呼吸をして、鼻咽頭の空気を、オイスタヒー管を通じて、中耳に至らせるのである。小兒などに行うには、口を閉ぢて鼻にて深く呼吸することを命じ、其呼吸の時に乗じ

ポリツ  
エルの法

て突然鼻を撮んで通氣されるがよいのである。然し此法はオイスタヒー管の甚しく腫れて居るときなどには、效を奏せぬばかりでなく、此法を反覆して居ると、鼓膜に鬱血を起し、又脳にも鬱血する恐がある。

(二) ポリツエルの通氣法 凡そ拳の二倍ほどの大きさの厚い丈夫な護謨球に、櫛の實形の口をつけたものを取り、まづ病人の口に少しばかり水を含ませ、護謨球の櫛實形の口を一方の鼻孔に挿み、右の耳に通氣しようとするときには、右の鼻孔左の耳は左の鼻孔左の手にて左右の鼻翼を撮み、患者に口に含んだ水を嚙みこませると同時に、右の手で護謨球を壓して氣流を咽頭に輸つて、オイスタヒー管から中耳にはいらせるのである。若し此法を行ふことが拙く、水を嚙みこ

むと空気を輸るとが同時になかつたならば、空気が鼓室に通ぜぬのみならず、突然胃の中へ侵入して胃を膨脹させて痛を起すやうなことがある。若し空気が胃にはいつたならば、少しばかり水を飲めば、其空気は嚙氣になつてすぐに出てしまふ。此通氣法を行ふ前には、よくはなをかんで置かなければならぬ。小児には水を含まさないで、唯護謨球を壓して空気を輸つただけで通氣の目的を達し得ることがある。號泣して居るときには殊にさうである。又あながち水を飲まないでも、唯嚙下運動をしただけでも通氣することが出来る。

此ポリッテルの通氣法の便利な點は、容易に行ひ得ること、従つて小兒などに用ひ易きこと、或は患者自身に自宅にても行

「カテール」法

ひ得らるること、次の「カテール」法の如く患者が不快を感じぬこと、氣流の壓の高いことなどである。

(三)「カテール」を用ひて通氣する法 此法は日常耳科醫が用ひて居る通氣法であつて、診斷の爲にも、治療の爲にも最も便宜であるが、勿論素人には行ひ得ぬのみならず、醫師でも普通の不馴な人にはちよつと、こきうがわかり難い。

「カテール」は長さ十五仙迷、太さ二乃至三密迷ばかりあつて、其前端が少しく曲り、末端は稍圓く膨れ、後端は漏斗狀に廣つて居る。其質は銀又は硬護謨である。此「カテール」の前端を下鼻道から鼻腔に入れて、後ろの鼻孔を出て、咽頭の側壁にあるオイスターヒー管の口に達せしめ、後端は空気を輸送する二重護謨球に連ね、其護謨球を壓して空気を輸

イスタヒー管から鼓室に達せしめるのである。之にて薬液を鼓室に輸らうとするには「カテーテル」の中へ適宜に滴らしこんで置いて、それから護謨球に連らねて空気を輸り、空気に依りて、薬液を鼓室迄吹き込むのである。

第十一章 注意すべき二三の耳病

(一) 外聴道炎 之に外聴道全體の侵されるものと、一部分の侵されるものがある。

一部分の外聴道炎は、器械、耳匙、「ピン」などで聴道に傷をつけたときに、そこへ有害の微菌が侵入した爲に起るのであつて、之を癰と名づける。癰の出来るのは、毛根の皮脂腺であつて、概ね幾つも一度に出来たり、續いて出来たりする。始めには、其部分の皮膚が赤く腫れて、物が觸れると痛み、重い症は

注意すべき二三の耳病 外聴道炎

癰

進んで化膿する。此癰の膿が皮膚につくと、其部に第二の癰が出来来る。故に一側の耳から他側の耳に傳つたり、器械などに附著して、他人に傳はることがある。

外聴道の癰は、小兒には稀で、貧血虚弱の成人に多い。殊に婦人には屢出来る。中には毎度之に罹る人がある。痛が強くて眠ることが出来ず、患者が憂鬱になる。痛は晩から夜にかけて強くなり、朝は大に減ずる。談話をしたり、固形の物を食べたりすると痛が増す。或は此外聴道の一部の炎症が進んで全體の炎症になることがある。

外聴道の全體の炎症は耳に冷水を注いだり、酒精を滴らし込んだり、異物を取り出さうとして、外聴道を傷つけたりしたときに起るものであつて、屢中耳に迄炎症が蔓延すること

がある。通常一側の耳だけに起るもので、小兒に多い。  
 外聴道全體が急性の炎症に罹ると、初めに耳の張るやうな  
 感竝に搔痒が起り、熱を發し、脈の搏動と耳鳴とを覺え、次で  
 追々烈しくなる痛が起る。體温は高くなる。聴道の皮膚が眞  
 赤になり、甚しく腫れて、全く塞つてしまふことがある。分泌  
 物は初めは薄いが、後には濃くなつて、膿のやうである。劇し  
 い症になると、耳の周圍に迄炎症を起して腫れることがある。  
 る。或は此急性症が早く癒らないで慢性になることがある。  
 外聴道の急性の炎症は、一部分のもつても、全體のもつても、  
 凡て頭及耳に充血することを避けるのが必要である。故に  
 過劇の運動、刺戟性の飲食物、殊に酒類の飲用、温の急變、外聴  
 道を物にて刺戟することなどを避けなければならぬ。炎症

鼓膜の炎  
急性鼓膜炎

の劇しいものには、醫師の指圖に従つて、外耳の前に、水蛭を十  
 匹乃至二十匹ばかりもつけることがある。耳の温罨法は大  
 に有効であるが、久しく用ふるのはよろしくない。耳の中へ  
 は少し壓す位にして、綿を入れて置くがよい。其他は醫師の  
 治療に任せて置かなければならぬ。  
 (二) 鼓膜の炎症 之に急性と慢性とがある。  
 急性の鼓膜炎は、多くは外聴道又は中耳の急性の炎症と共に  
 起るものであつて、鼓膜だけに起ると云ふことは稀であ  
 る。之が起ると俄に劇しい痛が起り、緊張の感動脈の搏動、熱  
 い感、烈しい耳鳴がある。通常二三日で病氣の絶頂になつて、  
 それから速に快方に向ふものである。病勢の劇しい間は鼓  
 膜が甚だしく赤くなつて腫れて居る。本症には耳を洗うた



り、鼓室に空気を通じたりするやうな刺戟は凡て避けなければならぬ。

鼓膜慢性炎

鼓膜の慢性の炎症は、體質の虚弱な者に起ることが多く、耳に搔痒緊張の感がある他に別に著しい症状はない。主に異物、耳聾などが鼓膜に觸れて居た爲に起るのである。鼓膜は光澤が無くなつて汚れたやうな白色になり、ところどころ上皮が剝がれて居る。或は赤みを帯びて肉芽のやうなものが見えることがある。此症は常に鼓膜を清潔にするやうに注意しなければならぬ。

鼓膜の裂傷

(一) 外聴道の空気の壓が俄に高くなつたとき、即ち劇しい音響たとへば耳の近傍で大砲を發射するやうな音が耳にはい

つて來たとき、竝に平手で耳を打たれた時の如く、外聴道内の空気が壓されて濃くなつたとき。

(ロ) 最も多く原因となるのは、固いもので突き破ることである。就中耳の掃除をする爲に入れた耳匙、縫針、藁の莖などで誤つて突き破ることが多い。

(ハ) 急に鼓室の空気の壓の高くなつたとき、たとへば噴嚏、烈しい咳嗽、通氣法などの場合。

(ニ) 頭骨の振盪竝に骨傷の場合。

烈しい音波の爲に健康の鼓膜が破れると云ふことは、以前は信じられなかつたが、今日では實際にあることを認められて居る。ハルトマンは嘗て砲兵の射的演習のときに、監聽室で榴弾が破裂して、其傍らに腰をかけて居た三人の砲兵

の音に向うて居た方の耳の鼓膜が何れも破れたのを見た  
 と云うて居る。  
 平手で打たれた爲に鼓膜が破れるのは通常左側の耳であ  
 る。是は打つ者が右の手を用ふるからである。往々水中に飛  
 び込んだときに聴道の空氣が俄に壓されて鼓膜の破れる  
 ことがある。病氣に罹つて居る鼓膜は殊に破れ易い。鼓膜の  
 破れる部分は多くは、其下半部である。  
 劇しく打たれたとか、高い所から落ちたとか云ふやうなこ  
 とで、頭骨に劇しい震盪が起つたときには鼓膜が破れる。  
 鼓膜が破れたときには、耳の中で物が裂けたやうな感があ  
 る。往々破裂した音を聴くことがある。稀には之が爲に卒倒  
 する。重聴の起る軽重は鼓膜の裂けた度と迷路の共に傷は

れて居る度とによるものであつて、概ね劇しい耳鳴がある。  
 外聴道からはいつて來た物の爲に鼓膜が破れたときには、  
 同時に聴骨迷路が傷はれて、負傷後暫らく烈しい眩暈嘔吐  
 などを起すことがある。  
 破れて間のない鼓膜の孔は卵圓形であつて、負傷後兩三日  
 間は、其創縁に鮮紅色又は暗黒色の血液を匠らして居る。大  
 きく破れたときには、鼓室の内壁が見える。  
 鼓膜の裂傷は數日間て概ね全く癒えるものである。癒えて  
 しまへば痕跡もわからぬやうになる。  
 裂傷が出来たならば、痲衝を起ささぬやうに注意して、自然  
 に癒えるのを待つがよい。殊に感冒に罹らぬやうにしなけ  
 ればならぬ。耳を洗ふのはよろしくない。耳には消毒綿の栓

中耳の急性炎症

中耳の急性加答兒

をして置くがよい。  
 (四) 中耳の急性炎症 中耳の急性の炎症は、多くは鼻及咽頭の感冒性の急性加答兒の爲に起るものである。殊に小兒の軽い急性加答兒は此原因から來るものである。膿性の重い炎症は、小兒も成人も主にも急性の發疹病即ち麻疹、猩紅熱、窒扶斯、痘瘡、實扶垤里などから起る。  
 中耳の急性炎症を急性加答兒と急性膿炎とに區別する。然し兩方ともに同一症であつて、唯病勢の軽いと重いとこの差があるだけである。  
 甲、中耳の急性加答兒 初めは痛の強いこともあり、左程強くないこともある。耳の塞つたやうな感があつて、耳鳴が起る。分泌物の少ない間は重聴は軽いが、分泌物が増して來る

中耳の急性膿炎

と甚しくなる。痛は病側の頭迄及ぶものであつて、夜は劇しくなり、晝は軽くなる。小兒は體温が高くなり、全身の症状が起る。そして屢乳嘴突起が侵されて、其部分を壓すと痛む。  
 中耳の急性加答兒は、甚だ速に經過するものであつて、一日又は數日の中に病氣の絶頂になり、それから急に病勢が退くものである。殊に鼓膜が破れて分泌物が外へ漏れると、直に苦痛が去つてしまふ。  
 中には中耳に唯急性に充血が起るだけで、分泌物はなく、疼痛、耳鳴を發し暫らくたつと癒るものがある。殊に小兒には其充血が急に劇しくなり、僅に數時間で又消えてしまふことがある。  
 乙、中耳の急性膿炎 急に中耳に化膿性の炎症を起す原因

の中で最も多いのは鼻及咽喉の加答兒であつてクナップの統計によると耳病の患者總數八千二百二十九人の中で中耳の急性膿炎に罹つて居た者が五百六十四人あつて其六十四布仙は鼻及咽喉の加答兒が原因であつたと云ふことである。麻疹、窒扶斯、猩紅熱、痘瘡などのやうな發疹病の經過中又は癒えた後に重い中耳急性膿炎の起ることがある。其他異物、冷水、化學的刺戟などによりて耳が直接に刺戟を受けると中耳急性膿炎の起ることがある。入浴時又は顔を洗ふときなどに水が鼻から中耳にはいつて重い中耳炎の起ることがある。我國に顔を洗うときには冷水を鼻から吸ひこんで口から出すと風をひかぬと云ふ俗説があつて之を信じて行つて冷水の耳にはいつた爲に

重い中耳炎を起したものがあつた。プロシルと云ふ人の説によつて水に溺れた者が二十七人を驗べたところが中耳に水のはいつて居る者が二十三人あつたが死んだ後水中に投ぜられた者二十三人中中耳に水のはいつて居る者は一人だけであつたと云ふことである。是は裁判の鑑定上参考になることである。中耳が急性膿炎を起すと前に述べた急性加答兒の症状が尙一層劇しくなる。即ち痛が非常に強く殆ど堪へ難い耳鳴があつて動脈の搏動が槌で打たれるやうに劇しく感じられる。痛は耳だけでなくて頭にも傳はり音響を受けたり、身體を動かしたり、精神を充奮したり、刺戟性の食物を用ひたりすると劇しくなる。熱は甚だ高く、腦の症状が起つて眩

聾がしたり、譫語を云うたりして、腦膜炎かと思はれることがある。小兒は殊にさうである。若し迷路まで充血すると、耳は全く聴えなくなる。病氣が起つてから大抵二三日経つと、鼓膜に孔が出来て、俄に外聴道から膿が澤山に出て、絶えず耳から滴つて居る。鼓膜に孔が出来れば、大抵痛、耳鳴、熱などが軽くなるものである。多くの症狀が非常に強いに拘らず、鼓膜が破れなかつたならば、醫師が小刀を以て切開しなればならぬことがある。或は外聴道にも劇しい炎症を併發することがある。

急性の中耳炎は、たとひ化膿性のものでも、幸ひに少しの變化をも止めないで、全く癒えるものがある。或は多少重聴だけの残ることがある。若し迷路に變化が残つたならば、重聴

が強い。或は容易に回復しないで、慢性炎に變ずることもある。又不幸の場合には、炎症が腦に傳つて、生命の危険の起ることがある。

中耳の急性炎の起つたときに最も注意すべきことは、凡て其衝を助けるやうな害を避けなければならぬことである。故に空氣の溫の變化に遇はぬやうに、常に患者を室内に籠らせ、化膿性で熱のある者は、全く臥床に就かせるがよい。そして外聴道竝に鼓膜の急性の炎症のときの如く、亢奮性の食物、酒類を禁じ、精神を亢奮すること、身體を過劇に運動することを誡めなければならぬ。初期には耳を洗うたり、通氣法を行ふたりするものもよろしくない。

軽い急性炎には、耳の部分に溫罌法を施し、或は綿をあてて

オイスター  
管の  
閉鎖  
及  
狭窄

置くがよい。劇しく痛むときには耳翼に氷嚢をつけて效のあることがある。其他は醫師の治療にまかせるがよい。

(五) オイスター管の狭窄及閉鎖 管の炎症は、鼻咽頭加答兒の炎症の蔓延した爲に起るのであつて、中耳も共に侵されることが多いが、中には管だけが炎症に罹ることがある。管の狭窄又は閉塞は此爲に起ることが最も多い。殊に微毒性の咽頭病はオイスター管を侵すことが多い。

分泌物がオイスター管の口に懸つて居るとき、竝に粘い分泌液が管内に溜つたときには、管が閉塞する。或は管には病氣がなくとも、咽頭の腫脹の爲に、管口が狭くなつたり、閉ぢられたりすることがある。或は筋の弛緩又は潰瘍殊に微

毒性の潰瘍の癒えたあとの瘢痕の爲に此症を起すことがある。

オイスター管が急性加答兒に罹ると、俄に換氣を妨げられて速に重聴が起るから、患者は突然耳病に罹つたと云ふことを訴へる。然し其癒ることも亦甚だ急であつて、加答兒が無くなる、嘔下運動、噴嚏、欠伸又ははなをかむときに、突然管が開通して再び換氣を營むことが出来て、聴覺が回復する。中には一度開通しても、再び閉塞して、鼓室の空氣が吸収せられて稀薄となり、再び重聴になることがある。斯様な症は度々通氣法を行つて居ると癒る。

管の狭窄又は閉塞の第一の療法は、通氣法を行つて空氣を鼓室に輸つて重聴を治すと云ふことである。初めには強い

鼓膜穿孔  
慢性炎

壓でなければ空氣が通らぬが、一度通れば成るべく低い壓で通すがよい。殊に小兒は強い壓を用ふると痛を起すことがある。鼻咽頭の炎症は醫療を受けて全治させなければ、一度管が開通しても再び塞つてしまふ管が久しく塞つて居ると、鼓膜が甚しく内方に窪んで、重聴が劇しくなるのみならず、中耳に炎症を起すやうになる。

(六) 鼓膜の破れて居らぬ中耳慢性炎 鼓室に分泌物の溜つて居る中耳の慢性炎の、鼓膜に孔の開かない症は、獨り發することもあるれば、他の病に併發することもある。最も多く本病を惹起させるのは、鼻咽頭加答兒であつて、オイスマーロ管にもやはり炎症がある。屢急性の炎症から轉じて來るものであつて、重聴は重く、通氣法を行つても、聽覺が著しく回

中耳慢性  
膿炎  
耳漏

復せぬ。分泌物は久しく鼓室に溜つて吸収せられぬものであつて、其液は粘液性のものが最も多く、中には水のやうなものや、膿のやうなものもある。

此症の療法は單に通氣法を行ひ、又は鼓膜を截つて孔をあけた後に通氣法を行つて溜つて居る分泌液を除き、且炎症の原因を除かなければならぬのであつて、専門醫の治療が必要である。

(七) 中耳慢性膿炎 是は耳病の中で最も注意すべきものであつて、世間で耳漏即ちみゝだれと稱へて居るものは、概ね中耳慢性膿炎である。

中耳が慢性の化膿症に罹るのは、多くは急性の中耳炎が治療の不適當病の原因の持續、體質の不良などの關係で、早く

快復しないて慢性に轉ずるのである。殊に發疹病たとへば猩紅熱、窒扶斯、麻疹等の經過中に起つた急性炎で、鼓膜を損じたのは、癒え難いものであつて、慢性炎になることが多い。外聽道を窺うと、屢全く膿様の分泌物で充たされて居る。分泌物の量は甚だ多く、屢綿の栓を取換へなければならぬことがある。又寢て居る中に液が外へ漏れて枕を潤ほすやうなことがある。或は之と反對で、量が甚だ少なくて、外聽道の奥の方の壁だけが膿で被はれて居ることがある。若し鼓膜の破れかたが小さいとか、腫脹が強いとか云ふやうなことで、分泌物の外に漏れることが妨げられると、それが濃くなつて、塊を造つて鼓室の中に留つて居ることがある。分泌物が空氣に觸れると、體温の爲に分解して、其中に種々

の微菌が蕃殖し甚だ不快な胸の悪い臭氣を放つものである。其臭氣は腐つた牛酪などに似て居る。斯様に臭氣のある耳漏を持つて居る者は、常に人から擯斥せられることを免れぬものである。加之患者自身も不快の臭氣と味との爲に苦められ、且其分泌物がオイスタヒー管から咽頭に下りて來て、之が爲に消化を妨げられることがある。鼓膜の孔は大きいことも小さいこともある。即ち全く鼓膜が破れ果てて居るものもあれば、針の頭ほどのものもある。孔は通常一つである。中耳の粘膜炎は常に鼓膜の保護によりて、外から來る刺戟を避けることが出來て居るのであるから、中耳膿炎の場合の如く鼓膜が破れると、中耳粘膜炎は凡ての刺戟を受けて、屢急



性の炎症を起すのである故に耳漏のある者が水浴の際に、水を耳に入れたとか寒い風に當つたとか刺戟する薬を用ひたとか耳の中に物を入れたとか云ふやうなときに、鼓室に新らしい焮衝を起して、強い耳痛、耳鳴、動脈の搏動甚しい重聴などを起すことがある。鼓膜の破孔の大小は多少重聴の強弱に關係があるが、最も之に關係のあるのは、迷路窓の振動性が傷はれて居るか居ないかと云ふことである。耳痛、耳鳴は慢性膿炎には唯稀に起ることがある。中耳の慢性膿炎は、數箇月又は數箇年に亘つて自ら癒えることもあれば、生涯癒らないで、いくらか宛膿性の分泌物を漏らして居ることもある。幸ひに癒つても鼓膜が甚しく傷

はれたり、鼓膜、聽骨、鼓室との間に癒著が起つたりして居るものは、重聴を残すことを免れ得ぬのである。中耳の膿性炎には、種々の合併症が起るから、其豫後がよいとか悪いとか云ふことを定めることが甚だ困難である。其合併症の中には危険な腦の病氣があつて、之が爲に死することがあるのであるから、耳漏は決して忽にして打棄てて置かないで、早く醫師の診察を受けなければならぬ。醫療の傍ら患者の注意すべきことは、身體の榮養を良くすること、耳の刺戟並に充血を起すことを避けること、耐忍して全く醫師が之でよいと云ふ迄治療を怠らずに續けることなどである。

(八) 鼓室硬化 此病氣は音響を受けて振動しなければなら

ぬ聴器の部分をおうて居る粘膜が硬くなつて、聴骨と鼓室の壁との間に癒着などが起つて居るものである。之は鼓室の加答兒が反覆した爲に起る。

初めは鼻咽頭、オイスタヒー管、鼓室に起つて居た、急性の腫脹が後には鼓室だけになつて、分泌物が無くなり、結締織が肥厚して癒着が起るのである。そして之が爲に重聴が起る。

慢性加答兒に罹り易い性質の者、腺病質の者には、中耳硬化症が起り易い。又多血質の人にも起ることがある。職業上、湿度の變化に遇ふものも此症に罹り易く、多くは兩方の耳が侵される。同じ硬化症で迷路迄も侵されるものがある。此迷路の侵される硬化症は、體質の弱い者、神経質、竝に佝僂質

斯痛風の素因のある者に發し、且遺傳に由つて發する者が多い。

此二症は耳鳴と重聴とが起り、其重聴の早く進むものは、豫後がよろしくない。重聴の進みの遅いものは、病の進むことも遅いものであつて、其重聴が或度まで進むと、止まる望がある。中耳に通氣法を行つて、重聴及耳鳴の減ずるものは、癒る見込のあるものである。此症に罹つて居る者が、屢精神がぼんやりしたり、頭や耳が重い、塞つたやうな感がしたりする。感冒に罹ると、眩暈がしたり、鈍い刺すやうな痛が起つたりする。外聴道に乾燥、緊張、搔痒の感があつて、患者は搔かなければ我慢の出来ぬことがある。

(九) 耳翼及外聴道の畸形

(イ) 耳前の漏管 耳輪の前、耳珠の

上に、小さな凹陥又は盲管を持つて居る者がある。時々此孔から膿のやうな液や、ねばい液の出ることがある。此畸形は遺傳するものであつて、ハルトマンは祖父、父、兄弟二人、姉妹五人が揃うて此畸形を持つて居るのを見たこと云ふことである。

(ロ) 耳贅 耳珠の前に贅瘤を持つて居る者がある。

(ハ) 複耳及耳翼の畸形 稀には通常の耳翼の前に、尙一つ形の小さい耳翼を持つて居る者がある。又稀に全く耳翼の缺

けて居ることがある。然し多少耳翼の痕跡、軟骨、耳垂などが

残つて居るものである。

(ニ) 外聴道缺損 耳翼の發育の悪いもので、外聴道が缺けて居ることがある。中には外聴道の外部が皮の膜で塞つて、鼓

重聴及聾の詐欺の鑑定

膜は尋常のものもある。是は手術して開くことが出来る。

第十二章 詐れる重聴及聾の鑑定法

詐つて重聴又は聾と稱して居る者を見破る必要のあることがある。是は此講話には、ちと縁の遠い話であるが、興味のあることであるから、茲に述べて置く。

醫師が重聴を鑑定するには、まづ重聴を訴へて居る者に、一方の耳であるか、雙方の耳であるかと云ふことを尋ね、耳を検査して、重聴の起るやうな變化があるかないかを調べた上で、次のやうな鑑別法を行うのである。

一方の耳の重聴の鑑定

一方の耳の重聴の鑑別法 (イ) 最も單簡なのは、被檢者の眼を閉ぢさせた後に、指か綿か、健康な耳を塞いで置いて、音を聞かせるのである。耳を斯様に閉ぢても、骨導から音響を

傳へて能く聽えるものであるが詐つて居る者は其音が重  
 聽と稱して居る方の耳から聽えるのであらうと思ふから、  
 検査者が聽えたかと尋ねると大抵聽えませぬと答へる。  
 (口) 前と同じやうに健康の耳を指又は綿で塞いだ後に振動  
 させた整調叉を額に立てると眞に一方の耳の聽えぬ者で  
 も其音を感じることが出来るものであるが詐つて居るも  
 のは前の検査法のとくと同じ考で矢張聞えぬと答へる。  
 (ハ) 被検査者の眼を閉ぢさせて置いて醫師が診察に使ふ二條  
 の護謨管のついた聽診器を取り護謨管を被検査者の耳に挟  
 み検査者が聽診器の口に口をあてて話をしながら指で護謨  
 管を互に撮んで塞ぐのである。此時一方の耳が聽えぬもの  
 であつたならば度々話が中絶してわからなくなるが詐つ

兩耳の重  
聽の鑑別法

て居る者は能くわかつて居ながらわからぬまねをしよう  
 として、いろいろの虚言をつくものである。  
 (=) 新聞のやうな紙を巻いて二つの漏斗を造り之を被検査  
 者の兩方の耳にあて、二人の検査者で互に兩方から低い聲で話  
 して被検査者に其言葉を繰返へさせて見ると一方の耳を重  
 聽だと稱へて居るものは少しもわからぬと答へる。斯様の  
 ことを數回行つた後に突然兩方から同時に違つた話をす  
 ると眞に一方の耳の聽えぬ者ならば健康の耳からはいつ  
 た言葉を繰返へすことが出来るが詐つて居る者は兩方か  
 らはいつた言葉がごちゃごちゃになつて聞きわけられぬ  
 から之を繰返へすことが出来ぬ。  
 兩方の耳の重聽の鑑別法 兩方の耳の重聽を巧に詐つて

居る者はちよつと看破し難いことがある。之を鑑定するに  
 は、其病氣の原因經過などを詳しく聞糺し、音聲の抑揚竝に  
 其舉動に注意し、熟睡して居るのを急に喚び起し、酒に酔は  
 せ、或は其者の耻づる様のこと、たとへば汝の襟に虱が這う  
 て居るなど云うて、其舉動を窺ふのである。愚かなものは、平  
 常の言葉の調子で、不意に汝の耳を病んだのはいつからか  
 など尋ねると、我知らず答へることがある。兩方の耳共多少  
 聴えると稱して居る者には、始めに高い聲で話し、漸次聲を  
 低くすると共に、被檢者の激するやうなことを云うて、其舉動  
 を窺うのも一法である。又眼を閉ぢさせて置いて、時計を用  
 ひて幾度も兩方の耳の聴覺を検査して、いつも其聴える距  
 離が同じであるかどうかと云ふことを見る法を試みて、

啞の鑑定

よい。  
 啞の鑑定法 まづ詳しく耳を診察し、聾になつた原因を糺  
 すと云ふことが肝要であるが、尙次のやうな法を行ふがよ  
 い。檢者が被檢者の室にはいるときに、わざと戸を音を立  
 て閉ぢたり、強く足ぶみをしたりすると、眞の啞は皮膚から  
 感じて人のはいつて來たのを知つて、後ろを向きなどする  
 が、詐つて居る者は強て知らぬさまを装うて居る。又整調又  
 を額に立てると、啞でも其振動を感ずることが出来るが、詐  
 つて居る者は感ぜぬと云ふことを手眞似などで示すもの  
 である。最も妙なのは、被檢者を他の啞と交はらせるのであ  
 る。啞同志ならば、意を通ずることが出来るが、詐つて居る者  
 はそれが出来ぬ。又詐つて居る啞は、舌を出して、指で示して

頭を振り、それで物が云へぬと云ふことを訴へなどするが、眞の啞は舌は物云ふものであると云ふことさへ知らぬのが常である。

先づ耳科に就て注意すべきことは、大要右に述べたところで盡きたのである。耳科は他の科よりも、一層素人の耳馴れて居る用語に乏しいので、之を一般人にわかるやうに説くと云ふことは殆ど不可能と云うてもよい位である。定めて讀者の中には不得要領の感を起される方もあらうが、まづ初めに擧げた甚だ單簡な耳の構造と作用とを能く記憶せられて、之に照し合せて、順次に咀嚼玩味せられんことを乞ひたいのである。尙此他に聾啞のことに就ては、家庭衛生叢

書第十二編に自分の講話が出て居るから、就て見られんことを希望する。

耳之衛生終

明治四十一年四月廿八日印刷  
明治四十一年四月廿八日發行

家庭衛生講話  
定價表  
一冊金參拾五錢 郵稅六錢  
六冊金壹圓九拾錢 郵稅參拾六錢  
三冊金參圓七拾錢 郵稅七拾二錢



編者 中川恭次郎  
發行者 大橋新太郎  
印刷者 石川金太郎  
印刷所 株式會社 秀英舍  
東京市日本橋區本町三丁目八番地  
東京市日本橋區西紺屋町廿六七番地  
東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

發兌元

東京市日本橋區本町

博文館

醫學博士 三島通良君著  
**はらのつとめ**

本書は多年職を文部にて奉じ學校衛生に於て、且つ個人衛生中、最も重要にして、且つ國家富強の基となる婦人及小兒の健康と保護を、増進せんとすべく、家庭の衛生を、用ひて、我々の家庭に適用せしむべき方法を、叙したるものなり。著者は、衛生の法を、我々の家庭に適用せしむべき方法を、叙したるものなり。著者は、衛生の法を、我々の家庭に適用せしむべき方法を、叙したるものなり。

**母親の心得**

下田歌子女史著  
全一冊洋裝大判  
紙數二百六十八頁  
定價金拾五錢  
郵稅金六錢

**家庭衛生訓**

千原勝景 鹿島櫻 君共編  
全一冊洋裝大判  
紙數四百八十六頁  
定價金拾六錢  
郵稅金六錢

**元兌發**

海軍大軍醫 隱岐敬次郎君譯  
**女子衛生學**  
本書は米國の大醫アイ、ビーヴィス氏の原著を趣味に當るものなり、我が日本が有史以來未曾有の大捷を得たのも、その健全なる家庭に於て、健康な小兒が育つて來たるが故なり。本書は著者が多年家庭に於て經驗したる衛生上の注意を記述したるものにして、節々々々悉く健全なる家庭を造るべき要素を指示し、其文頗る平明にして、一讀誰人にも了解し得べき家庭必備の寶鑑なり。

**文博館**

西田敬女博士著  
**衛生と兒童**  
全一冊洋裝大判  
紙數二百四十四頁  
定價金拾五錢  
郵稅金六錢

每卷醫學專門大名家講述

**家庭衛生講話**

洋裝大判美木  
紙數各約百六十頁  
定價金拾五錢  
郵稅金六錢

- 醫學博士 三輪德寬君述 **一般救急法**
- 醫學博士 森 林太郎君述 **衛生學大意**
- 醫學博士 林 春雄君述 **藥物の大要**
- 醫學博士 緒方正清君述 **妊産婦之心得**
- 醫學博士 筒井八百珠君述 **花柳病講話**

本書は三輪博士が素人にわかり易く親切丁寧に講述せられたものであつて、身體に變態の起つた場合に、如何に醫術の來るを待つ暇なく、急に處置すべき方法を一切を網羅したるもので、一般の家庭に於て、旅行に甚必要な心得である。教師、警官、航海者、消防夫など、本書は衛生學の意義沿革より土地、下水、埋葬、上水、都會、家庭、空氣、氣象、衣服、營養等に分類し、尙各項數々に分ちて講述せられたるものにして、各家必讀の良書なり。

東市京日木橋本區三丁目 圖書部 發行  
東京市京日木橋本區三丁目 圖書部 發行



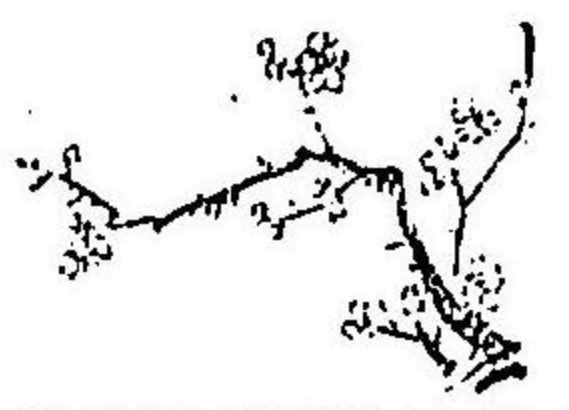
醫學博士 井上通泰 先生監修

# 家庭衛生叢書

全二十冊洋裝菊美本○正一冊貳拾郵稅六錢宛

- |  |   |  |   |  |   |   |   |   |   |   |   |
|--|---|--|---|--|---|---|---|---|---|---|---|
| <p><b>第一編</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▲口給 北里長四博士(肖像)</li> <li>▲傳染病の話 北里長四博士</li> <li>▲胃の衛生法 北里長四博士</li> <li>▲眼科衛生法(第一) 北里長四博士</li> <li>▲眼科衛生法(第二) 北里長四博士</li> <li>▲血族結婚と健康 北里長四博士</li> <li>▲淋病と家庭 北里長四博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第一) 北里長四博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第二) 北里長四博士</li> </ul> | <p><b>第二編</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▲口給 宮本博士(肖像)</li> <li>▲腸炎扶助に就て 宮本博士</li> <li>▲婦人の衛生一般 宮本博士</li> <li>▲婦人及小児の眼の衛生 木下博士</li> <li>▲眼科衛生法 木下博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第一) 木下博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第二) 木下博士</li> </ul> | <p><b>第三編</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▲口給 三輪井上博士(肖像)</li> <li>▲室内空氣に就て 三輪井上博士</li> <li>▲眼科衛生法 三輪井上博士</li> <li>▲小児科衛生法 三輪井上博士</li> <li>▲小児の衛生に就て 三輪井上博士</li> <li>▲遺尿症に就て 三輪井上博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第一) 三輪井上博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第二) 三輪井上博士</li> </ul> | <p><b>第四編</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▲口給 朝倉博士(肖像)</li> <li>▲腸胃の話 朝倉博士</li> <li>▲耳の衛生法 朝倉博士</li> <li>▲乳児の衛生法 朝倉博士</li> <li>▲狐胆とヒステリー 朝倉博士</li> <li>▲眼病の話 朝倉博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第一) 朝倉博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第二) 朝倉博士</li> </ul> | <p><b>第五編</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▲口給 岡三輪博士(肖像)</li> <li>▲創傷の話 岡三輪博士</li> <li>▲神經の衛生に就て 岡三輪博士</li> <li>▲アフトリヤの話 岡三輪博士</li> <li>▲皮膚の衛生に就て 岡三輪博士</li> <li>▲皮膚科の衛生法 岡三輪博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第一) 岡三輪博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第二) 岡三輪博士</li> </ul> | <p><b>第六編</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▲口給 大澤博士(肖像)</li> <li>▲ベストの話 大澤博士</li> <li>▲家庭の衛生に注意すべき 大澤博士</li> <li>▲二の家庭の衛生に注意すべき 大澤博士</li> <li>▲産時の話 大澤博士</li> <li>▲産科の話 大澤博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第一) 大澤博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第二) 大澤博士</li> </ul> | <p><b>第七編</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▲口給 遠山博士(肖像)</li> <li>▲意に關する家庭の注意 遠山博士</li> <li>▲家庭と衛生 遠山博士</li> <li>▲家庭の中の衛生 遠山博士</li> <li>▲便秘の話 遠山博士</li> <li>▲花柳病の衛生法 遠山博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第一) 遠山博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第二) 遠山博士</li> </ul> | <p><b>第八編</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▲口給 木村博士(肖像)</li> <li>▲婦人妊娠力の話 木村博士</li> <li>▲肝臓の話 木村博士</li> <li>▲分娩時の衛生 木村博士</li> <li>▲小児の衛生に就て 木村博士</li> <li>▲小児の衛生法 木村博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第一) 木村博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第二) 木村博士</li> </ul> | <p><b>第九編</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▲口給 瀨川博士(肖像)</li> <li>▲肺病の話 瀨川博士</li> <li>▲婦人妊娠力の話 瀨川博士</li> <li>▲小児の衛生に就て 瀨川博士</li> <li>▲小児の衛生法 瀨川博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第一) 瀨川博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第二) 瀨川博士</li> </ul> | <p><b>第十編</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▲口給 林博士(肖像)</li> <li>▲飲酒血族の退化 林博士</li> <li>▲不妊の話 林博士</li> <li>▲消滅の話 林博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第一) 林博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第二) 林博士</li> </ul> | <p><b>第十一編</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▲口給 吳博士(肖像)</li> <li>▲痲瘋の話 吳博士</li> <li>▲結核の話 吳博士</li> <li>▲結核の衛生法 吳博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第一) 吳博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第二) 吳博士</li> </ul> | <p><b>第十二編</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▲口給 陸軍醫學博士(肖像)</li> <li>▲痲瘋の話 陸軍醫學博士</li> <li>▲慢性の話 陸軍醫學博士</li> <li>▲慢性の衛生法 陸軍醫學博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第一) 陸軍醫學博士</li> <li>▲眼科患者の注意(第二) 陸軍醫學博士</li> </ul> |
|--|---|--|---|--|---|---|---|---|---|---|---|

發兌元 東京日本橋區三丁目 博文館



## 實習產婆學

產科婦人科 稻生鑑次郎君纂著

本書は斯道の專門醫にして、多年産婆養成の経験ある著者が、其平素講述の稿本を基礎とし、之に佛蘭西國の學者の著述を参考として記述したるものにして、其說從來我國に行はるる産婆學に比して、異彩を放てるもの多し、挿圖甚だ多くして、文章將た初學者をして了解し易からしめんと務めたるに實に間然する所なき良書なり。

◎定價上巻金七拾錢郵稅拾錢◎下巻金八拾錢郵稅拾錢

全二冊洋裝大判  
上巻紙數三百十八頁  
下巻紙數三百十八頁

## 衛生 妊産婦の務

醫學士 田村貞榮君 朝夷孤舟君譯述

妊産は妻たる者の第一の天職であるから、淑女諸君は必ず此智識を得なければならぬ、世間には此智識を疎略にする爲に、免れる事の出来ぬ困難や危難などに陥る者が多いのは、甚だ遺憾である、されば、一家の主母たる者は、是非共本書一冊を家庭に備へ置きて參考に供し、新婚せんとする令嬢は、約束を極め衣服調度などを支度する以前に、豫め本書を一讀して自己の身體が天職を完くするに足るや否やを詳にするが宜しい、本書は妊産に關する身體の適否、妊娠の有無、分娩の難易、母後母子の手當等に就きて、妊産婦又は産婆の心得べき總ての事項を親切平易に委しく説明したものである。

全一冊洋裝大判  
紙數四百十六頁  
正價金七拾五錢  
郵稅金拾錢



## 發兌元 東京日本橋區三丁目 博文館

醫學士 伊庭秀榮君著

婦人の職業中最も其任に適するものを産婆學とす、方今斯學に關する新書少きにあらざると雖も、多くは其書長篇に亘り其文硬澁に傾き、以て平易通俗に解を興へたるものなし、著者茲に見る所あり、産婆學研究生の爲め其講餘の複習本たらしめ、人事を期し最も平易なる問答體を以て、斯學の要義を説述す、而して斯學の泰斗濱田玄達先生の懇篤なる校閱を受く、以て本書の精確を知るに足るべし。

◎全一冊洋裝四六判◎紙數二百八頁  
◎定價金五拾錢◎郵稅六錢



女學世界衛生顧問  
糸 左近君著

四季 通用 通俗治療法 附、養生秘訣

全一冊洋裝四六判  
紙數四百餘頁  
正價金貳拾八錢  
郵稅金拾六錢

醫者は病人に取つて命の親なり、救ひの神なり。其の病魔を退治して起死回生の効を奏し、垂死の病人を回復し、三千世界に一つしかなき玉の緒を取り止むるものあり。世に神醫仁術の稱ある所以なるべし。さりながら、世間に神醫と稱するものは、雨夜の星よりも少く、難病危病に悩む人は、山河の砂よりも多し。この限りなき病人患者をして、限りある神醫の方針を仰がしめんこと、無理の注文といふべし。況んや山間僻地に到つては、一度の診察を請ひ、一服の薬を飲むに神易の事にあらず。病人は手空ふして病魔の横行するに任ずのみ、是に於てか世に醫道の智識を必要とする所以なり。著者糸左近氏は、仁術に造詣深く、諸病の濶奥を究めて、洩らすなし、今其尤も普通なるもの七十餘種を網羅して、備にす。療方針灸を説く、益し車輿を要せずして、千里の遠きに趣き謝儀を求めずして、萬病の適薬を授く其功德の大なる昔への蒼髮扁鵲にも譲らずといふべし。

醫學得業士金澤巖君著  
通俗治療急救法

全一冊正價金拾三錢郵稅金四錢  
本書は衣食住婚姻育児防疫等の一般衛生法より諸病治療法看護法及藥品調製法急病頓死火傷等の救護法、温泉、海水浴、轉地療養其他常に心得べき百般の衛生醫業に關する事項を細大漏す所なく詳細に記載し且文章平易にして通俗を旨としたれば何人と雖も常に一本を備ふべきものなり

阪本隆哉君著

衛生食物調理法

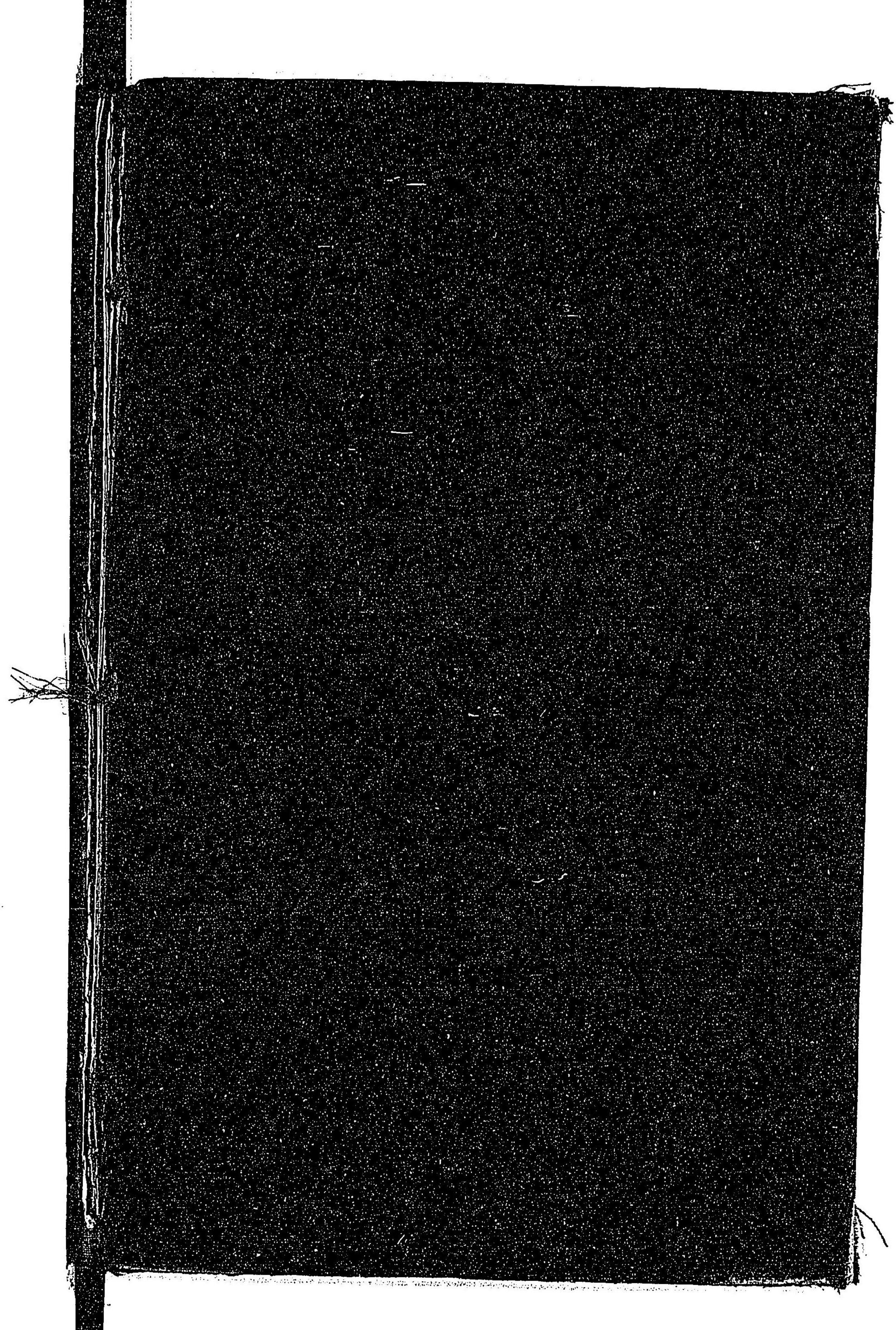
全一冊和製菊版美木  
正價金三十錢郵稅六錢  
(一)調理に就ての心得(二)金と時間の經濟(三)器具(四)色素類(五)飲料水  
(六)中藥(七)魚鳥米野菜の區別(八)調理の方法(九)香味料と嗜好品(一〇)泡刀切り方(一一)食物調理の使方(一二)出し汁(一三)注け酢(一四)酒(一五)油(一六)調味料(一七)油(一八)糖(一九)和物類(二〇)漬物(二一)揚もの類(二二)餛飩の製法(二三)寄せ物類(二四)調理雜集外數項

滋養病者の食餌

全一冊新形上製美木  
正價金貳拾錢郵稅四錢  
●滋養物の製法(鰻魚卵・鰻魚肉・鰻魚汁・人工營養品) ●食餌要論(牛乳用法) ●胎卵・獸肉・魚肉・蔬菜類・豆類・蒸餅肉漿汁 ●酒 ●茶 ●咖啡 ●病者の食餌調理 ●病人の食餌種類 ●各病人の食餌例及禁忌 ●消化器諸病 ●循環器諸病 ●呼吸器諸病 ●泌尿器諸病 ●運動器諸病 ●皮膚諸病 ●眼科諸病 ●傳染性諸病 ●婦人科(此外數件)

發兌元 東京日本橋區本町三丁目八番地 博文館

67  
67





060171-000-7

61-64

耳之衛生

賀古鶴所/著

M4 1

CBK-0054



